

# 堀の内中世居館跡をめぐって



信州大学附属図書館



<10>0020810990

町教育委員会

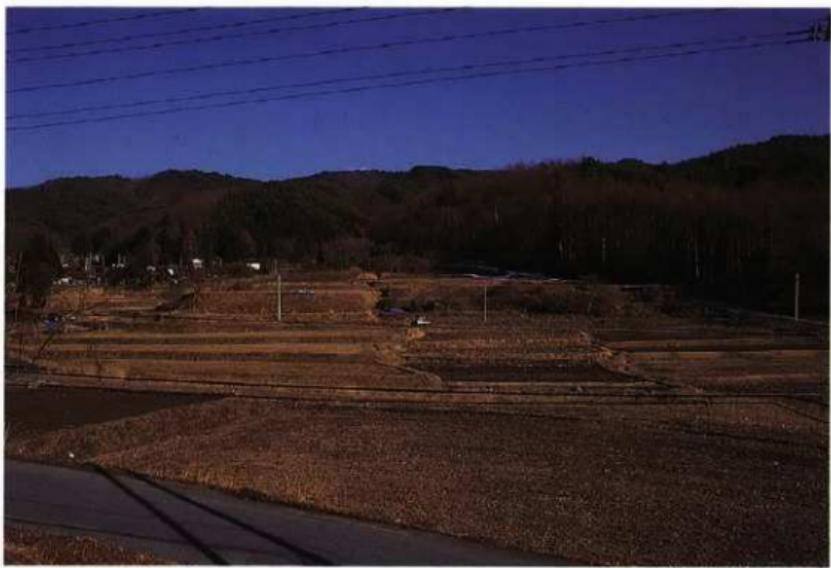
092,131  
H89

## 正誤表

ページ	誤	正
1頁下の写真説明 3行目	信州大学助手	信州大学助教授
11頁 1行目	確認の大ききな	確認の大きな
31頁 3行目	(28ページ参照)	(32ページ参照)

# 堀の内中世居館跡をめぐって

辰野町教育委員会



堀の内遠望



主郭部よりの眺め



居館の主郭部



第12号方形竖穴

# ―――――― 目 次 ―――――

## 第1章 はじめに

はじめに	3
堀の内の居館の最初の記載	3
ほとんど知られていない堀の内の居館跡	4
再び光を	5

## 第2章 地名と地形

沢底地名のイメージ	11
史料から見た沢底	13
地名から見た山寺	14
山寺を通った武田軍	16
堀の内の地名	18

## 第3章 居館の構造

居館の構造	21
建物をめぐって	23
堀の内左近はどんな人	24
出てきた生活用具	25

## 第4章 山寺の中での居館の位置

地字図	31
垣外地名	31
村の世界	34
貴方なら居館をどこに造りますか	36
居館の使われた時期	37
武田氏の側から見たこの時代	39
居館の役割と位置	41
山寺は交通の要衝だった	43

## 第5章 歴史の中から

武田氏と関所	47
関所とは何か	48
道押さえのための施設	49
信玄のイメージ	51
村への対処	53
戦国大名の権力浸透	55
堀の内館の可能性	56
県下の居館跡	57
辰野町の居館と山城	58
瀬 戸 城	63
羽 場 城	64

## 第6章 おわりに

山城をめぐって	69
地域の見直し	70
中世の景観	72
伝えることの意味	73
武田氏の城の特徴	74
公の権力としての武田氏	75
新たな研究のために	78
地域の文化財	80
疑問を抱く心	81
おわりに	83

あとがき

# 第1章 はじめに

## はじめに

皆さん今日は、ご紹介に預かりました箇本です。私は中世の研究を行なっているのですがよくわからない事がいっぱいありますので、本日はいろいろ皆さんに教えていただたくつもりでやって来ました。特に私はこの地域に住んでおりませんので、地名や地形などいろいろ間違えると思いますが、その点はぜひご教示下さい。

話に入る前に、お集まりの方の中で山寺地区にお住まいの人ちょっと手をあげて頂けますか、はいわかりました随分おいですね。山寺以外の辰野町の方、辰野町以外の方、それぞれ多く来て頂きまして、有り難うございます。ほとんどの方が町内のようにですね。

## 堀の内の居館の最初の記載

それでは、本題に入りましょう。これから話をしていかなくてはならない、堀の内居館について最初に触れているのは『長野県町村誌』という本です。これは後に辰野町の一部となった朝日村から、明治10年(1877)に県に提出された書類が元になっています。この本では、この地域を次のように説明しています。

堀の内の居館は、「本村の東にあり永禄年中～永禄年中」というのは1558年から1570年ですから、16世紀半ば過ぎ、武田信玄の時代です～「堀の内左近住居せし」とい伝え、僅かに跡を存す」とのことです。明治10年くらいの段階では、今の堀の内の居館跡に関して、堀の内左近と言う人が住んでいたという言い伝えがわずかに残っていた



笛本正治

昭和26年、山梨県に生まれる。昭和49年信州大学を卒業。名古屋大学院を経て、信州大学助手、平成6年同人教授、現在に至る。

だけなんですね。さらに、「安政年中開田の節、直径三尺、直立一丈二尺、周囲三丈余の穴二ヵ所あり、刀剣、小柄、笄等種々これあり、年間遠隔に付き確証しがたし」と続きます。安政年中というのは1854年から1860年ですから、この7年後には明治になります。安政年中、江戸時代の一番最後の頃、堀の内は今の形のように水田が開かれたのです。その時に直径3尺（ですから約90センチメートル）、直立1丈2尺（深さが約3.6メートル）、周囲を巡らせて3丈余り（ですから約9メートル）あまりの穴が2ヵ所出てきたのです。その穴の中から、刀剣、小柄、笄（巻をかき上げるのに使う道具）など、いろいろなものが出てきたようです。しかし明治からみるともうだいぶ前の事だから、はっきりわからぬと書いているんです。

今日私があそこで話をしていましたら、地元の方の中に「私はお祖父さんからそういう話を聞いた」なんて教えてくれる人もいました。ですから地元には、そういう言い伝えが近年まであったわけです。

### ほとんど知られていない堀の内の居館跡

長野県では「長野県の中世城館跡－分布調査報告書－」という調査報告が出ています。これには長野県内の中世の山城や居館などが、網羅的に調べられたことになっています。

皆さんは、長野県全体で堀の内のような古い屋敷の跡だと昔の山城の跡だとされているものが、どれくらいあると思いますか。適当に言ってみますので、これくらいだろうと思うところで、手を上げてみて下さい。とりあえず、300より多いと思う



講演会風景

人、随分いますね。逆に少ないとと思う人、先程よりは少ないようです。300より多いとする人が多数ですので、1,000以上あると思う人はどれくらいますか。ほとんどの人が、300から1,000の間と考えているようですね。念のために、2,000以上あると思う人は手を上げて下さい。やはり随分少ないです。実際には、大体2,000から3,000あります。この本の中にも、それだけの調査結果があげられているのです。

ところが、昔の居館や山城が、これだけたくさん調べられている中に、私たちの町の堀の内の居館は入っていないんです。それから、この地域の居館跡や山城に関しては、篠田徳登さんという方が『伊那の古城』という本を、伊那毎日新聞から1971年に出されています。これは随分歩き回ってよく調べた本だと思いますが、この中にも記載されておりません。

『長野県町村誌』以降、再び堀の内の居館跡が記されたのは『辰野町誌』です。『辰野町誌 歴史編』では、所在地を「大字沢底山寺堀の内」として「河子沢の左岸の小台地、下に山寺の村落があり河子沢の登り口、西から南に谷が開け、荒神山が見える」と書いています。この歴史編ができるのが1990年ですから、これまで明治の『長野県町村誌』の調査の際に触れられ、『辰野町誌』が出るまで110年間も忘れられていたのです。

堀の内の居館跡は、長野県でも認知されていないような居館跡だったんです。

## 再び光を

これほど知られていない堀の内がなぜ着目されたか、なぜここに私がかかるよう



堀の内遺跡黒版

になったか、言っておきましょう。

辰野町の教育委員会は教育長さんをはじめ、係長さん、福島さん、大変能力のある人達です。堀の内の居館は長野県の城館跡の分布図にも載っていないにもかかわらず、町誌の編纂にかかわったこともあるって、教育委員会の人達は地名などからここが重要な遺跡だと考えたのです。それが圃場整備にかかっちゃったんで、一度見にきて指導してくれという依頼を県にしたのです。

堀の内の居館で、発掘するまで居館であることを示していたのは、地名と地形だけでした。堀の内という地名と地形だから、そこがいかに歴史的に大事なものであるかということを、教育委員会の人が言いだしたおかげで、堀の内に学問の光が当たられるようになったのです。この点をまず確認しておきたいと思います。

ところで、私は長野県文化財保護審議委員という役割をつとめております。長野県文化財保護審議委員というのは、長野県宝を指定したり文化財保護について指導したりする役割なんです。この関係で、市町村教育委員会が管轄下の遺跡などを壊したりする時にも、私のところに連絡がくる場合もあります。

一昨年、長野県教育委員会から電話がきて、「館らしいものがあるから、1回つきあってくれ」と言われました。そこで、飯田の調査が終わってから、帰りにちょっと寄ったんです。そしたら地元の方がみんな集まっています、私は来たのが初めてにもかかわらず、その場でこの居館の意義を説明をするという、とんでもない事態になっちゃったんです。

私は状況が分からずに来たのですが、地元では協議会に入っていたのです。私は県の人に連れてこられたんで、今何が行なわれているのかも、なぜ人が集まっているの



空より見た沢底区

かも知らなかつたのです。ともかく、一目見てこれは大事だと考えたので、そのことを強く主張したつもりです。つまりこの地域を考えたり、長野県を考えたりする上で、堀の内の居館は大変重要な材料ですと申し上げたのです。

今回は、どうして大変なものなのかを、改めて申し上げなければいけないことになりました。ですから私としては、皆さんに試験されているみたいな気がしてかなわないんですが、ともかく考えていることを述べさせて頂きます。



## 第2章 地名と地形



## 沢底地名のイメージ

地名がこの居館の確認の大きな役割を担ったということで、この地域の地名から確認していきましょう。具体的に堀の内は一体どういう場所であるか、地名と地形の問題を述べていきます。

先程触れました『長野県町村誌』には、この沢底が、「本村の東にあり。西は赤羽と田んぼ入り交じり、南は日向入山に連なり、東は湖南、豊田の両村に接し、北は平出山を境し、東西四十六町、南北二十五町。往古は多底郷と言う」と書いてあります。それでは、一応地名をめぐっていろんな本に当たってみましょう。

私たちの町で作った『辰野町誌』には、「南向きに開けている沢底の谷は周囲の山々がなだらかで、水にも恵まれてるので水田も多く、稲作の歴史の古さもしのばれる。沢底川の流れはゆるやかとはいえないが、山が低くて谷が浅いので漢字で沢底と書くような景観は少しも感じられない」とあります。そうですよねえ、私も最初来るときに地図でちょっと見て、沢の底だからきっとすごい所だらうなあと思ってきたんですよ。来てみたら違うんですよねえ。結構なだらかな所で、真ん中に川が流れている、広い場所なんで、案外に思いました。

『辰野町誌』はさらに、「この谷の上流は古来諏訪との関係が深く、諏訪の領分が尾根をこえて伊那側へ深く下がってきている。沢底の地名のおこりは諏訪底であるという説もあるが、諏訪側から後山とか上野とかいったように山を越えた向こうなのでそういったのかもしれない」と書いてあります。諏訪とのつながりを強調しているのが目を引きます。



日影とよばれる腰曲輪



沢底地区地形図

## 史料から見た沢底

私のようによそから来た人間は、地名の漢字を見て沢の底に思ってしまうのですが、この漢字は必ずしも古くからあったわけではありません。史料の中からこの地域の地名を確認しますと、最古のものは延文元年(1356年)ですから南北朝の内乱が終わって、室町幕府ができるばかりのころにできた『諏訪大明神絵詞』です。この史料は鎌倉時代の終わり頃に作られ、諏訪社の由緒とか状況が絵と一緒に記されたものですが、今は絵が失われています。この『諏訪大明神絵詞』という本の権 祝本～諏訪大明神絵詞にいろいろなものがありまして、その内の一つで、諏訪上社の神主の権祝家に伝わったもの～にひらがなで「させこ」と出てまいります。

次に、時代が大きく下って文明2年(1470)3月付の矢島文書があります。これもやはり諏訪の文書ですけれども、そこには「さそこ」と出てまいります。

さらに天正6年(1578)～もうこれは武田勝頼の時代ですね、戦国の終わりに近かった頃～の2月付けの「上諏訪造宮帳」、つまり諏訪上社を造る時に、こういう役割をもって造りなさいよという事が書かれている帳簿の中には、「沢底の原口の田別錢にて」と出てまいります。ここで初めて私たちの知っている「沢底」という字が出てくるんですね。

その後天正年間～武田勝頼が信濃を統治した時期の1573年から、武田氏滅亡後の1592年まで～の守矢文書(これは諏訪上社の最も重要な神主である神長を勤めた守矢家に伝わった文書です)に、「させこ」と出てまいります。



昭の内遺跡の調査

天正18年(1590)10月17日の市岡文書に、「さそこ」とあります。

天正19年の成立と言われている、『信州伊奈之青表紙之繩帳』に、「さそこ村」と記されています。

それから近世初頭に書かれた『赤羽記』に、源訪の境に「さそこ」とあります。

さらに、正保4年(1647)の『信濃国絵図高辻』に、「沢底村344石」が載っています。

こうしてみると私たちは今、沢底村と書いていますけれども、これは本来「させこ」あるいは「さそこ」だったのです。この言葉が地形を示すか、地域の特徴を示すものとして使われていたのです。ところが江戸時代になって、この言葉に「沢底」という字をあてはめたのです。これが検地帳などの正式帳簿に採用されて、固定したわけです。このために私たちは今、沢底の字感からなんとなく、沢の底のように思っているのです。しかし本来は、私はまだ理由はわかりませんけれども、「させこ」「さそこ」という、おそらく地形を表す言葉だったのです。

ともかく、「させこ」「さそこ」という地名は、14世紀なかばくらいから古文書などに見えてくる。しかし、見えてくるんであって、本当はもっと古くから使われていた言葉、地名なんだろうと思います。

## 地名から見た山寺

問題になってくるのは、今私たちがいる山寺という地名です。山寺に関して先程から出ている『長野県町村誌』は、朝日村の毘沙門庵に関係して次のように書いていま

### 歴史の中の沢底

延文元年(1356)成立の『諏訪大明神絵詞』(権祝本)——「させこ」

文明2年(1470)3月付けの矢島文書——「さそこ」

天正6年(1578)2月付けの『上諏訪造宮帳』——「沢底之原口之田別錢にて」

天正年間(1573~1592)の守矢文書——「佐瀬子」

天正18年(1590)10月17日付けの市岡文書——「さそこ 四百八表五斗」

天正19年(1591)成立という『信州伊奈青表紙之繩帳』——「佐そこ村」

『赤羽記』一保科筑前守き所領として「源方の界サソコ五百石」

天保4年(1647)の『信濃国絵図高辻』——「赤羽村」二百石「沢底村」三百四四石

す。

「応古には多聞山、松月庵とあい称え、建久三年草創にて本尊毘沙門天は源頼朝公信仰の靈像。当所より東方三十一町距離し、方一町なる平野あり、字山寺山と唱へ、そこに堂宇これあり、後野火にて延焼、天文年中今の所へ転地す。旧地へ石造の小祠を建立し、今存在す。沢底耕地持地庵なり。」

明治の時の説明によれば、山寺というもともとの理由はこの地から3キロメートル程上の山に、寺があったからだといいます。山の上の方に多聞山松月庵というお寺が建久3年(1192)に建立された。その本尊は源頼朝(1147~99、鎌倉幕府初代の將軍)が信仰をしていたものだと言います。ところが後に焼けて、天文年中に今の所へ移った。天文年中といふのは、武田信玄~実は信玄を名のるのはまだ後なのですが、ここではわかりやすく信玄で統一しておきます~が活躍した時代ですが、その時期くらいに今の地に移転した。昔の場所へは石造の小さな祠を作っている。これが山寺の元だといふ説明がついています。としますと、山寺の歴史にとっても戦国時代が画期だったことになります。

一般的に言えることは、大体平安時代の末ぐらいから山の中に対する信仰が非常に強くなりまして、お寺は山の中へ作られるようになる。ですから、山寺という地名は各地にあり、そのほとんどが古いお寺とのかわりだとされています。辰野町の山寺の場合、この説明が正しいかどうかわかりませんが、一応これが公式見解と言えましょう。



山寺のお堂

## 山寺を通った武田軍

ところで今まで述べてきたのは、ややもすればはっきりしない点も含まれていますけれども、これからはもっと具体的な話にしたいと思います。

山寺という場所が、でてくる最も古い史料は『高白齋記』です。この記録は、武田信玄の重臣だった駒井高白齋という人が書いたものです。記録の内容からして、彼は信玄の身近に仕えた重臣だと考えられます。ただしこれは現物、本人の書いた記録そのものは残っていないんです。今は、その『高白齋記』にいろいろ近世になって付け加えしたものの写しが残っているに過ぎません。ただしこの本の中に書かれていることは事実に間違いないので、後で書き加えられた部分を除き、注意深く読めばここに書かれていることは戦国時代の武田氏の動向を伝える、貴重な内容となります。

その中の天文11年(1542)10月1日の条～1542年というは、この前の年に武田信玄が父の信虎を駿河へ追放して、家を繼いだ年ですに「二十九日、丙子信方上伊那口動く」と出ています。板垣信方といえば武田の家臣でも有名な武将ですが、彼が上伊那口に動いた。つまり戦争のために陣を動かしたというのです。さらに「十月大、朔日、丁丑、高白陣所上伊那山寺」と続いています。

ですから天文11年10月1日に、高白齋という武田の家臣の大物が、陣所を上伊那の山寺に設けたのです。この背景を具体的に言いますと、高遠頼繼の軍が同年9月10日に下諏訪に放火しました。というのは、諏訪氏を滅亡させる時に武田氏と高遠氏が手を結ぶんですね。手を取り合ってはさみ撃ちの形で、諏訪頼重をやっつけちゃったんです。高遠氏は諏訪氏の一族だったのに武田氏と手を結んだのは、自分が諏訪氏を繼



荒神山より山寺を望む

ぎたいと考えたからです。源氏を滅ぼすと武田信玄と高遠頼継は、諏訪を半分こしたんですが、頼継としては本来は自分は源氏の一派だから全部取るべきだという意識を持っていました。

このため、武田と高遠の間で戦争になりました。その結果、高遠軍は9月10日に武田方の下諏訪に放火しました。対する武田軍では、その翌日に板垣信方が軍を動かして、その後26日に高白斎が藤沢口(高遠口)に放火しました。そして28日に箕輪次郎藤沢頼親(さわよりちか)~彼はこの近辺では大変有名な人ですね~が、武田信玄に出仕して(私も信玄さんに仕えますといって)います。29日に板垣信方が上伊那口に動いて、前記10月1日と続くわけです。

上伊那郡で山寺の地名は、辰野町の他にもう一つ伊那市にあります。武田軍が高遠に攻めていく時期で、藤沢氏との関係もある山寺というと、辰野の山寺か伊那市の山寺かちょっと悩むところもあるんですが、諏訪から攻めていく場合だと、やはり辰野町にならざるをえないだろうと思います。ですから地名として、山寺が最初に出てくるのは『高白斎記』だと思うんです。『辰野町誌』もこの意見をとっています。

もう一度言いますと、山寺という地名は史料からすると、武田信玄の軍が高遠氏と戦う時に出てくるのです。上伊那攻撃に際して、高白斎が陣を山寺に張ったことはほぼ確実なんですね。その場所がどこかは明らかではありませんが、堀の内の居館の跡はその第一候補となると思います。

ということになりますと、どうして山寺でなければならなかったかが問題になります。この点は、もう一回後で確認しなくてはなりません。

着陣、	廿八日乙未、 箕輪次郎出仕、 <small>(元 高遠口)</small>
廿九日丙子、 信形上伊那口動、	十月大朔日
丁丑、高白斎所上伊那山寺、	七日癸未、源氏西方
庚寅御室歸、	
奉行高白、	

〔高白斎記〕

九月廿六日辰刻、被仰付僕間、高白斎澤口放  
火案内者(守矢太郎)神長一騎、諏訪藤原守方竹慶ハ遅

## 堀の内の地名

居館は堀の内という地名にありますが、堀の内という地名は全国各地にいっぱいあります。この堀の内という言葉を民俗の言葉をいっぱい集めた辞書である『改訂総合日本民俗語彙』は、次のように説明しています。

「堀之内。奥州から九州まで分布している地名で、町村にも字・小字にもみえる。東京都下や埼玉県にはこの地名が殊に多く、『新編武藏風土記』には八十四の字を挙げている。城址にある村には多くの堀之内の小名ありと同書に見え、堀というとただちに城砦を想像しやすいが、事実は堀之内は必ずしも戦術上のものではなかった。中世の武士は通例砦には住まず、戦時の防御地は険阻な山の地にあって、平時は平地にあたかも大地主のようにして住んでいた。その屋敷を取り囲んだ工作物が堀で、往々その内には田も畠もあったようである。その中には後閉すなわち空閑地を含む堀之内もあり、ドイツのホーフに比べられる名主の垣内とも思われる。」

堀の内の地名については、人によって非常にいろんな言い方をしていますが、中世では山の上に城を作りその麓に居館を造る。その居館には防御のために堀を巻く率が多い。だから堀の内だというのが一般的な説明なのです。

堀の内という地名には昔は居館が構えられていた。中世の居館を示す言葉が、堀の内だというのが広く知られている考え方です。



八幡社達望

### 第3章 居館の構造



## 居館の構造

それでは辰野町にある堀の内の地名の中には、どのように居館が作られていたのでしょうか。

先ず地名を参考にして考えて行きましょう。堀の内という今日我々が見学した中心部分があります。その上にさらに堀の内の地名があり、その南側にも堀の内があります。中心をなす堀の内の西側、一段低い場所に腰巻という地名があります。その南側にはホウケ地名があります。

私最初見た時には単純に、中心部をなす堀の内の大きさが、ちょうど中世の少し規模の小さい土豪の屋敷の大きさににびったりだと考えました。ですから最初私が見たときには、この部分が屋敷地として非常に重要な部分ですと申し上げたんです。

中心部の下に腰巻という地名がありますが、腰巻と言う地名の場所を上から見ると、一段低く見えます。これは、城の回りを腰巻のように巻いている平坦部の装置と言う意味です。つまり、堀の内は、屋敷を建てる場所を平らにして、しかも下に腰巻きをつけた居館だということが最初に読めたわけです。

しかも、下の道路の位置から居館を見てみると、明らかに腰巻は一段高くなっています。道があって、腰巻があって、とくに南の端の所からみると、一気高く見えるわけです。私はこれが一つの中世の居館のあり方を示すのではないかと、感動したわけなんです。まず、居館の中心部の大きさは50メートル四方ぐらいで、中世のちょっと小さい武士の館の典型的な大きさであるといえます。

問題は地名や地形から何が読めるかですが、わからないことばかりです。実際問題



として、まず入口がわかりません。私は最初腰巻とホウケ(ホウケ)の間から東に向かう、狭い道じゃないかと考えました。

「ホウケ」という地名がありますが、まず私にはこの地名がわかりません。小学館の『日本国語大辞典』で、ほうげを調べてみると、「放下」という言葉があります。これは1.「禪で、精神的・肉的な一切の執着を捨てて解脱すること。また執着をおこさせる種々の条件を放棄すること。あるいは投げ捨てる事。」、2.「投げ捨てる事。投げおろすこと」、それから3.「中世近世に行なわれた芸能のひとつ」と出てきます。これではとても理解できないわけです。

いろいろ考えて、「防碍」ではないかと思いました。防御するための、防衛のためのボウケという地名が、ここに残っているのではないかと理解したんです。ですから入り口としては、腰巻とホウケの間の可能性があると考えました。

ところが、現地で発掘をされている福島さんによると、北側の堀の内地名の北東が、入口になる可能性が高いとのことです。まだ結果は出ませんけれども、目下のところ最初に入口がどっちにあるのかもわからないんです。私は腰巻とホウケの高さから、両側から防御するために入口は南東の隅ではないかと想像したのですが、今からの発掘の成果によっては、反対側ということになってしまうかもしれません。

私は地形と地名だけ見ていましたので、上の方はまったく関係ないだろうと思っていたんです。ところが今日来て見ると、東側に堀が出ています。なによりも驚いたのがこの堀です。ここに堀があることは、この居館の防御が大変にきついということです。普通だったならばこんな山の方から攻めてくることを想定して家を造ることはないと思います。



ホウケと堀

じゃあ何故そんなに防御をきつくしなければならなかったのか、そこがまた問題になります。

### 建物をめぐって

堀の内の中で一番見晴らしが良くて、日当たりがいいのは北西の隅ですね。わかりますよねえ。あそこまで行ったら、上伊那の眺めがどんどんよくなります。

ところで、今日までの発掘の結果、建物は中央よりやや東側に南北に配列があることがわかっています。この建物については、今後の発掘結果によってでないとまだ検討できません。

もう一つ、『長野県町村誌』に見える穴の問題があります。土坑は中世ばかりではなく、江戸の町からもいっぱい出ているんです。江戸時代の町の中では、大事な物をみんなこの中に入れて、火事の場合は土をかけて物資を守った可能性があります。堀の内では江戸時代の末に水田を作った時に、丸っこい深い穴が二つ出てきて、そこから刀とか小柄が出たといいます。この穴の場所がまだわからないんですが、あれだけ深い穴だったらひょっとすると、発掘の結果出てくるかもしれません。

ところが、堀の内に本当に富を持った人が住んでいたとしたら、もうこの時期にはお蔵があってしかるべきだと思います。しかしお蔵の形跡は、目下のところまったくないですねえ。あの穴はひょっとすると物入れの穴なのか、何なのか知りたいものです。

家のことは先程からの繰り返しになるんですが、建物を作るに際しては地山を整地



堀の内より上伊那を望む

しました。現在のような地形のおおもとは、水田を造る時の整地ではなさそうです。山を平らにし、なおかつ掘り切って、建物を造った。ここまでだけが我々が今のところ情報として持っている材料なんです。普通だったらこの時期の重要な居館では、もう礎石を使った建物が出てもいいはずだと思うんですが、今のところあれは掘建て的なものです。でこれも一体何なのか、このように問題が多く残されています。

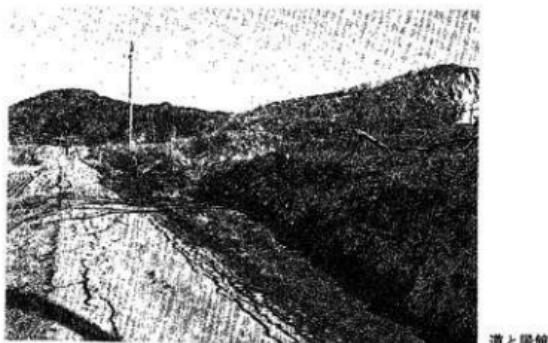
そうするといやあ一体この建物は何のためかということになります。これは今後考えねばならないのですが、まず先に確認しておきたいのは、ここの場所が一番眺望がいいってことです。そして居館の下のところに道が通っていた。この道の存在が今後重要な問題になります。

### 堀の内左近はどんな人

今まで私かいったのは問題ばっかりなんですが、さらにつけ加えます。ここに住んでいたのは地元の伝説あるいは、『長野県町村誌』によると、堀の内左近と言う人です。

堀の内というのは、先程説明しましたように日本全国にある地名です。堀の内というものは居館を示します。ですから、地名が堀の内なんです。堀の内は名字とは思われません。堀の内という場所に左近が住んでいたというのが、この地の伝承といえます。誰が住んでいたのかわからぬけれども、堀の内には左近と音う人が住んでいましたよ、ということだけが伝えられていたのです。

もっと地域に根づいた、山寺左近という人が住んでいたという伝承だったらよくわ



道と居館

かるんですよ。この場合は山寺地域に根を張った、山寺を名字とする左近だということになるからです。また福島左近がいたっていうなんだったら、なるほどなと思います。でも堀の内にいたのは堀の内左近だ、あそこ堀の内というところに居館があつて左近という人がいただけと伝承されている。逆にいうと、地元にとってはたいして関係がなかったからこのような伝わり方をしたのではないでしょか。

本当に地元に関係のある人だったら名字はきちんと残すはずでしょう。しかも伝承によると永禄年中～1558年から1570年～ですから、仮に永禄年中という時間幅全部とったとしても、12・3年、せいぜい10年くらいしか住んでいなかつたことになります。この居住時間の短さは問題になります。

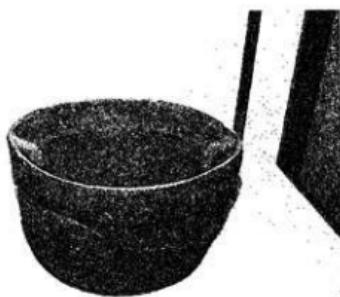
ちなみに言いますと、居住期間の短さは発掘結果から証明されそうです。堀の内の遺跡から出た遺物は、古いものでは縄文の建物やなんかがあります。それから中世の前期の遺物もあるんですが、全体としては遺物が少ないんです。もし伝承とは逆に、この居館に住人が長く住んでいたとするならば、もっと遺物がごろごろ出て良いと思われますが、そうではないのです。

堀の内の居館跡では生活の匂いのする物が、あまり出ていないのが特徴なんです。

## 出てきた生活用具

それでは生活の匂いはないのでしょうか。当然そんなことはありません。

その一つは内耳鍋です。内耳鍋というのは、内側に耳のような形のものを作り、そこに通じる土器です。地元の人の中には、昔この破片を拾った経験がある方が



内耳鍋（上の山遺跡出土）

いまして、外側が真っ黒だったといっていました。真っ黒だった理由は、煮炊きに使われたからです。内耳鍋が使われていた時期には、まだ鉄が貴重品だったんでしょう。もし鉄が豊富であれば現代のように鉄製の鍋が使われます。けれども鉄が高価だったので土器だったわけです。鍋は自在鍵などで上からつるして使われることが多いのですが、そのためにはつるが必要です。つるは火にかけられた時に、焼けないように配慮しなくてはなりません。鉄が豊富だったら、鉄は焼けなくてよいのですが、おそらく鉄は用いられずに植物繊維で、縄のようなものが用いられたのでしょう。ということになりますと、直接火がつるにかかるないように、鍋の内側につるをつける必要があるって、内耳になったわけです。

内耳鍋が出たのですから、居館で煮炊きがされていたわけです。また可能性としては囲炉裏のような形態の火の使い方があったのでしょう。

それからもう一つ興味深かったのは、石臼が出たことです。中世の生活遺跡でよく出るものに臼とすり鉢があります。先程述べたように調理に内耳鍋が用いられていたとすると、土器ですからもろいものですし、熱伝導率もよくありません。したがって現代の我々がお米を歯いたりするような、圧力をかけて、長い時間火にかけておくような調理法ができない可能性があります。貧弱な煮炊きの道具しかない時には調理はどうにしたらよいのでしょうか。一番簡単な方法は、穀物を粉にして水でねって、調理するのではないでしょうか。穀物を粉にして、お湯の中に入れればすいとんができます。少し手を加えればうどんや蕎麦のようなものも可能です。そうでなければ、そのまま丸めて囲炉裏の中にいれておけば、信州名物のおやきができます。穀物は粉にする、粉食の時代が中世なんです。その場合、堀の内の居館跡では、すり鉢とか石



堀より出土した石臼

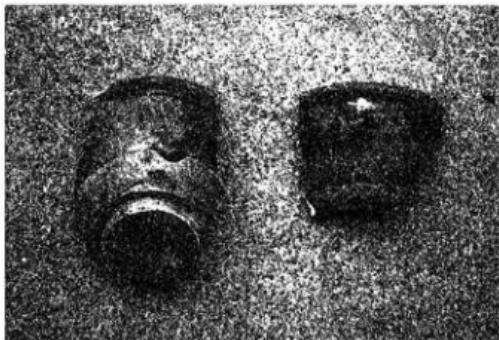
白の数があまりにも少ないのでないでしょうか。

それから生活に關係する石臼、掘り出された石臼はずいぶん立派な石臼です。石臼というのは使うたびにどんどん石が削られますから、目立てをしなければいけないです。ですから、もし石臼があるってことは、それだけの文化圏がないとできないわけなんです。でいつも手直しができる技術体系が作られなければならない。そのほかの道具も目下のところ少ないようです。

一方で、あそこからは中国製の陶磁器なんかも出ています。しかも古いものが出てきたりしています。また逆に新しいものも出てきています。これは一体どういう意味を持つのか、これから発掘の成果を踏まえて居館の主を考えていく必要があります。

ともかく、中国製品が入ってくるということは、上伊那の堀の内も中世に世界とつながっていた事になります。これから遺物を通していろんな問題を考えいかなくてはならないのです。

結論としては目下のところ堀の内の居館跡では遺物が少ないので特徴といえましょう。あまり遺物がない、生活の匂いが無いということは、この居館が非常に限られた時間しか使われていなかったことを示すのではないでしょうか。このように考えたいんです。



堀の内出土の天目茶碗



## 第4章 山寺の中での居館の位置



## 地字図

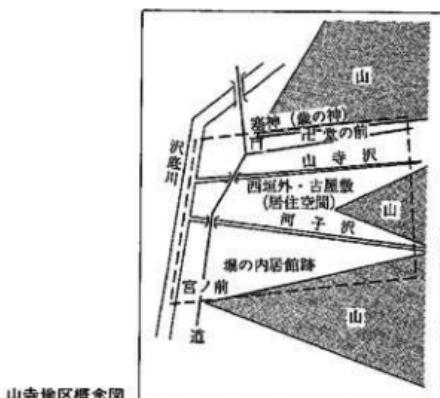
今度は少し広く問題を見ていきたいと思います。山寺の中での居館の位置についてまず考えてみましょう。

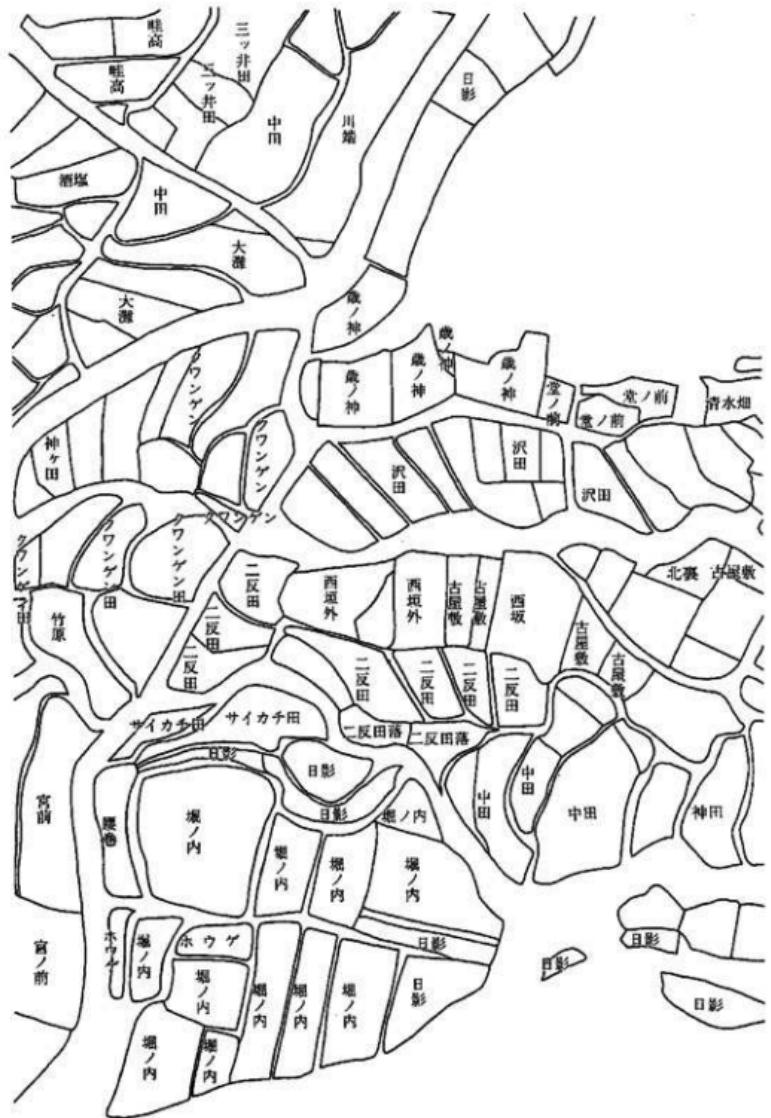
山寺地域の状況を確認するために、地字図を見てください(28ページ参照)。このような形になっているとそれほどに思わないかもしれませんのが、この地図の作成は大変なことです。一つ一つの区画に地名を載せていったものです。私が勉強する気になったのは、この地字図に刺激されたからといってもいいほどで、多大なエネルギーを要するものです。これは辰野町の教育委員会が作ったものです。ここに見える地名は、山寺の人にとってはごく当たり前の知識ですよね。皆さんにとっては当たり前の事実なのですが、こういう形あるものに仕上げていくことは、並大抵のことではないのです。地名も文化財であり、これをまとめた地字図 자체も文化財なのです。

この地名を元に、山寺の集落を理解しようとしたのが私の概念図です。全体像を認識するための概念図ですから、非常に極端な形になっています。この地名で非常に注目されるのは堀の内のある場所と、堀外・古屋敷の地名のある場所の二つです。つまり堀の内のある場所は、沢底川と山寺沢と河子沢が交わって作っている地形の南側ということになります。

## 堀外地名

最初に、堀の内の居館がない、村の中心部について触れてみましょう。





### 堀の内居館跡地字図

地名で私が面白く思ったのは、堀の内の対岸に西垣外とか古屋敷とかという地名が残っていることです。垣外と言う地名に関してはいろんな説があります。例えば民俗学の父の柳田国男は、「垣外は文字のごとく垣の内で、いわゆる土豪の閉い込んだ地名を意味する」としています。歴史家の戸田芳実さんも、「古代・中世の農村で周囲に垣を巡らして他と区別した1区画である」と記しています。いえることは、垣外という地名は、中世にはできあがっていたことです。垣外は比較的開発の古い場所につく地名なのです。

もう一つ、古屋敷という地名があります。古屋敷というのは新屋敷に対して古屋敷ですから、この地名も開発が古かったことを意味します。山寺地区で早い段階で人が住み、開発が行われた重要な場所が、この地名の場所だった可能性が高いのです。

皆さんは垣外・古屋敷の場所に住むのと、堀の内の居館の場所に住むのと、どっちに住みたいですか。おそらく日当たりは垣外・古屋敷のほうがいいですよねえ。風当たりもこちらの方が弱いのではないでしょうか。つまり堀の内の場所より、この場所のほうが日当たりが良くて、風当たりが弱いので、生活するんだったらなるべくならこっちのほうがいい、と思うんですがどうでしょう。

地形や日当たりからすると、山寺地区で最初に開発された場所は、垣外・古屋敷だっていうことなんです。逆に堀の内は新しい場所になります。のことと地名が重なるわけです。



川にはさまれた  
山寺地区

## 村の世界

あらためて山寺地区の概念図を見て下さい。

集落の北の入口の場所に塞の神がありますよねえ。塞の神っていうのは村の入口で、集落に悪霊などが入り込まないように遮っている神様、つまりさえぎる神です。ですからこの地域にとってみれば、ここが本来の村への入口のルートで、ここで災厄をさえぎろうとしたといえます。今の我々と違って昔の人は、病気も、悪いことも、全て悪い神様がやって来ることによってもたらされる。換骨するなら、そうした原因になるものを村の中に入れなければ、村の平安は保たれると考えたのです。このためには、村の入口を強い神様に守ってもらえばいいわけです。山寺という集落が、一つの他から切り離された世界だとすると、村の入口で悪いものを防ぐ特別な力を持った神に守ってもらえばよい、その役割を担ったのが塞神だったのです。その東側には天文年中(1532~55)に移ってきたという、毘沙門天を祀ったお堂があります。要するに北側の村の入口のところには、宗教ゾーンとでも呼ぶべきものが形成されていたのです。

同じように村の南側の入口に当たる場所には、山の上に八幡社がありました。堀の内側の西側の田圃は宮ノ前ですから、南の通路をはさむように宗教ゾーンが設定できます。

もう少し広い範囲で見てみると・垣外・古屋敷を中心とする山寺の集落の周囲は、沢底川・河子沢・山寺沢の三つの川と、南北と東側は山によってかこまれています。この川や山にも特別な意味がありました。

この川は防御の時には役立ちます。いわゆる堀のような役割をこれが負います。



塞の神

それから皆さんは、御盆の時の御供えや、七夕の時の笹などを祭りが終わってからどうしていますか。現在ではそういうことはなくなったと思いますが、昔は川に流しませんでしたか。なぜ川に流したのでしょうか。神社に参拝する時には手を洗います。また祭礼などに際してはみそぎをいたします。水は現在でも不浄なものを流してくれる神聖な力を持っています。その水が流れてくる川は、あの世～神様仏様の世界～と、この世～私たち人間の住む世界～を結びつけるものなんです。ですから、村人にとってこの地域は精神的には川である世と境されていたのです。村の世界は特別な世界と意識されたわけです。だからこそ、村の外には自分たちの世界とは異なり、悪い神様なども住んでいると考えていたのです。災厄は村の外から持ち込まれるので。

山も同じです。鎌倉時代に多聞山松月庵が山の上に建立されたのは、山に対する特種な意識があったからです。高い山はそれ自体が神聖なものとして信仰の対象にされます。山村などでは、村の氏神は一般に最も高い位置に営まれます。神や仏が住み、祖靈が住むのは高い山だという意識が存在したものといえます。ですから山もまた異界であったわけです。

こうしてみると、山寺に入ってくる道は南と北に宗教ゾーンが設けられて、神様によって守ってもらっていたことになります。その内側を物理的にも精神的にも山寺沢と河子沢が守り、その内部に集落が営まれていたわけです。そして東西は川と山によって守られました。同時に守る川や山は異界と結びつくものでもありました。

山寺の集落の住民にとっては、この集落はその中だけが海に浮かぶ島のようなもので、ここが平和な世界。その外は異界であると意識されたのではないでしょうか。



八幡社の祠

## 貴方なら居館をどこに造りますか

このような集落の配置を考えた場合、皆さんならどこに居館を造りますか。もし從來考えられてきたように、館を営んだのが地域に力を持った人で、山寺の集落に大きな影響力を持っていたとするなら、山寺のどこに屋敷を構えるか、それぞれ考えてみて下さい。

皆さん同じだと思うんですが、当然垣外・古屋敷の場所だと考えます。特に居館でわざわざ堀まで設けなければならないとすると、防衛に都合のよい山寺沢と河子沢にはさまれた地点を選ぶはずです。それなのに、堀の内の居館の主はこの二つの沢に守られ、日当たりもよい山寺の集落の中心部からはずれたところになぜ造ったのでしょうか。いや造らざるを得なかったのはなぜか、ということが問題になります。

もし堀の内の居館の主が山寺を支配するために家を造るのであつたら、居館は違うところに設けると私は思います。ちょっとさしさわりがあるかもしれませんか、言っちゃうとですねえ、私だったら集落の東側で、山の麓に当たる地域を選びます。現在の家で言うなら、山寺さんのお宅の位置です。ここに家を構えますと、集落のほとんどを一望の元に見渡せます。その上、山寺沢と川子沢の水を直接押さえることができます。生活のための水を一元的に支配でき、なおかつ住民を監視できるからです。その上、幹線道路から少し奥まっていますから、防衛上も都合がよいのです。

山寺という地名の所に、山寺という名字が残っているわけですが、このようなことは中世に相当強い力を持っていた家が、そのまま近世に百姓として地域にとどまつた場合でないと、一般的にはあり得ません。地形や名字、この家の歴史などからすると、



河子沢

山寺さんの先祖は山寺地域の土豪のような役割を負っていたものと推察されます。ですから、地域の領主としての性格は山寺さんの家に強く、堀の内の居館の主はむしろ外部からやって来たと思われます。

## 居館の使われた時期

伝説からすると、堀の内の居館に人が住んだのは永禄年中（1558～70）のようです。つまり武田信玄が信濃を治めていた時代の、わずか13年に過ぎないです。

堀の内左近という言い方は、地域に深く結びついた名前ではないと思われます。地域に深く結びつかなかったことは、ここに住んだ期間が短かったことと重なるのではないかでしょうか。堀の内の居館跡から出る遺物の量が少ないとや、その年代もこれを裏づける可能性が高いようです。もし長く住んでいれば、もっといろいろな遺物が出ててもよいはずですし、遺物の年代幅も広いと考えられます。また、建物の修理や増築が行なわれて、柱の穴なども多く出でしかるべきです。

遺物からは、やはり伝説のように短い期間しか堀の内の居館に主は住まなかつたようです。それは生活環境が悪いことから、居住空間としてはあまり適さないこともつながります。また、村の中心部でもないので、地域を支配するのにも都合よくありません。

先にも述べましたが、永禄年中というのは、武田信玄が信濃を統治していた時代です。そこで一つの考え方として、武田氏がこの居館の建設にかかわっていた可能性がないでしょうか。次に、武田氏のこの時期の状況を確認してみましょう。



### 武田信玄上伊那攻略年表

- 天正11年（1542年）6月24日 武田軍諏訪に入る  
24日 高遠軍諏訪に侵入
- 7月4日 諏訪頼重、桑原城を開城する  
5日 頼重、甲府に連行される  
21日 頼重、切腹
- 9月10日 高遠頼繼、上原城を攻撃し、下社・上社共に占領  
11日 武田方、板垣信方を諏訪に向かわせる  
19日 信玄、諏訪頼重の遺児虎王を擁して甲府をたつ  
25日 武田軍、安国寺門前の宮川のほとりで高遠軍と合戦
- 天文13年（1544年）10月末日 信玄、伊那に出兵し、荒神山城を攻める  
12月8日 頼繼軍諏訪に乱入、神長守矢頼真の屋敷に放火  
12月9日 信玄甲府に帰る
- 天文14年（1545年）4月11日 信玄、高遠攻略のため甲府を出発  
15日 信玄、秋突出に陣を張る  
17日 頼繼、城を捨てて逃亡する  
18日 信玄高遠に入る  
20日 信玄、福与城の藤沢頼親を攻撃する
- 6月1日 板垣信方軍が竜ヶ崎城を落城する
- 10月10日 頼親、和議に応じる  
11日 頼親、弟を人質に出し、城は焼かれる  
13日 信玄、小笠原長時領の塩尻に兵を出し甲府へ帰る

## 武田氏の側から見たこの時代

これまで何度か確認してきましたが、堀の内の居館はこの程度の規模の居館としては、山の側にも堀を掘り、西側には腰曲輪を形成し、防御に気を使っています。さらにもし腰巻とホウケの間が入口だとすると、随分守備が堅いように思われます。戦国時代でこのように居館の守備を固めなければならなかった時期としては、いつが考えられるでしょうか。

一つは、天文11年(1542)6月24日に武田軍が諏訪を攻めた時期でしょう。25日に高遠軍が諏訪に侵入し、7月4日に頼重は桑原城(諏訪市)を開城し、翌日甲府に進行され、21日に切腹しました。つまり諏訪氏は天文11年7月に滅亡したのです。そして諏訪郡は宮川を境にして、西を高遠頼繼、東を信玄が領することになり、諏訪氏の根拠地だった上原城(茅野市)には武田の守備兵が置かれました。

このため、天文11年段階で、諏訪は高遠氏と信玄との二つの領有者がいたわけです。けれども、高遠頼繼は9月10日に上原城を攻撃して守備兵を追い払い、諏訪下社にも兵を出して、上社とともに占領しました。そこで武田方は翌11日に板垣信方を諏訪へ向かわせ、信玄自身も頼重の遺子、虎王を擁して19日に甲府を立ったのです。その後、諏訪をめぐって両者の戦争が始まりました。9月25日、武田軍は安国寺門前の宮川のほとりで高遠軍と合戦し、圧倒的な勝利を得ました。

その後も頼繼は再び諏訪を攻略しようと機を伺い、藤沢頼親も彼と結んで武田氏に反旗を翻そうとしたので、信玄は天文13年10月に伊那に出兵し、藤沢頼親を福与城(箕



腰曲輪

輪町）の前進基地である荒神山城～これは皆さんよく知っているように辰野町内ですね～に攻めました。しかし頼継が頼親を支援するために攻め落とすことができず、信玄は12月9日に甲府へ帰りました。これに乗じて12月8日の夜に頼継軍が諫訪に乱入して、武田方の神長、守矢頼信の屋敷に放火しました。

天文14年4月12日、信玄は高遠攻略のために甲府を出発して、15日に秋突峠に陣を張りました。頼継は17日に城を捨てて逃亡し、18日に信玄が高遠に入りました。武田軍は20日に福与城の藤沢頼親を攻撃しました。しかし城は要害で、立てこもった人数も多く、そのうえ頼親の妻の兄である深志（松本市）の小笠原長時が、救援のために竜ヶ崎城に入ったため、落城させることはできませんでした。やがて武田軍にも今川義元（1519～60、駿河の戦国大名）と北条氏康（1515～71、相模の戦国大名）の援軍が加わり、6月1日に板垣信方の軍がやっと竜ヶ崎城を落城させました。10月10日に頼親も和議に応じ、翌日弟を人質にして城が焼かれました。信玄は13日に小笠原長時の領内である塩尻に兵を出した上で、甲府へ帰りました。つまり、天文14年に至って、はじめて上伊那も武田氏の配下に入ったのです。

天文11年から14年に至るこのような動きに対応するには、堀内の居館はあまりに無防備です。天文11年の武田軍の動きから、堀内の前を通る道が諫訪と伊那とを結ぶ重要な道路であり、この道を押さええることに意味があったことは確実です。しかし、堀内の遺跡の小さな設備でこの道を押さえたり、攻めてくる軍勢と戦うことは、ちょっと不可能ではないでしょうか。人数的にもあれだけの場所では、多くの人を籠め置くこともできません。もし、このルートを押さえ、軍事力にも対応するためだったら、堀内の西側の山の尾根に山城を築く方が効率的ですし、目的にも合致します。した



荒神山城

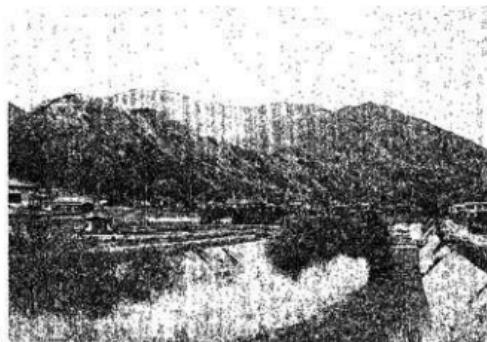
がって、堀の内の居館が天文11年から14年の、武田氏侵入に際して造られた可能性は少ないとえるのではないでしょか。もし武田氏が関与しているとしたら、支配の安定した時期と考えられます。

もう1回混乱した時期があります。それは天正10年(1582)以降、武田氏滅亡とそれに続く混乱の時です。長野県内の多くの山城がこの時期に改修されています。しかしながら、堀の内の場合には永禄年中という伝承もありますし、天正10年以降だったら戦闘規模が大きく、あの程度の居館で対応できるような戦乱でなくなりますので、堀の内の居館が作られた時期としては除外しておいていいのではないでしょか。

## 居館の役割と位置

それともう一つ、先程は言い忘れたのですが、中世の居館は多くの場合そこに地域の領主が住む屋敷であって、同時に領地を押える中核になります。自分の領地の中心に設けるのが一般的なんです。山寺の集落を本拠地にしている人だったならば、先程指摘した現在山寺さんのお宅が建っている場所に居館を作り、堀の内には作らないでしょ。ここならば、山寺の住民の動静をいつでも見ることができ、何かあったときにはすぐに住民を使ったり、即座に物を持ってこさせたりすることができますし、領民が不穏な動きを起こしてもすぐわかります。

にもかかわらず、何でこんな集落の端っこにいるのでしょうか。中心からはずれたこの地に館を構えねばならなかったのは、視点を変えて言うと、堀の内の居館の主の領地が山寺ではなかったことを意味すると考えます。もし山寺が自分の領地だったら、



黒川城

領地のまん中を押さえてしまうだろうけれども、これがなされない点に私はこの居館の特徴を見いだせると思います。

ところで堀の内の居館は、どう考えても道を見ています。西側の道路を意識して、この場所に居館が造られたことは疑いありません。それから、南の方の伊那方面が監視できる場所に配置されていることも間違いないでしょう。このことからすると、この居館が道の支配にかかわったものである可能性は強いと思われます。

ところが、武田信玄がいかにして道を押さえたかとか、関所をどのようにして作り、維持していたかなどといったことは、まだほとんどわかっておりません。例えば、皆さんは武田信玄の交通路政策と聞くと棒道を思い出します。ちょっと歴史が好きな人だと、数年前に放送されたNHKの日曜大河ドラマの「武田信玄」を思い起こすことでしょう。あの番組の最初に騎馬隊がまっすぐ走って行き、反対側からも騎馬隊が走って来る映像が流れました。私はあれは棒道を意図していると思います。棒道はこれほどよく知られているものです。この棒道は一般的に、武田信玄が川中島へ行くため、まっすぐな棒のような道を新たに開いたのだといわれています。しかしながら、この根拠とされてきた文書からは、そのような結論は到底出せません。また、当時の武田氏の権力ではそのようなことは到底できる状況にはありませんでした。ほぼ確実に武田信玄が新たに戦争用の棒道を作ったという説はだめになると思います。

武田氏の交通政策としてあれだけ有名なものであっても、見直しが必要なのです。まして、地域の道をいかに支配したかといったことに対しては、まだほとんど研究が手つかずです。



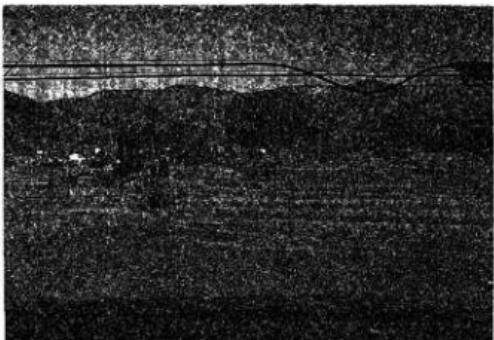
山寺沢

## 山寺は交通の要衝だった

中世の諏訪上社の神事として重要ななものに、通鑑神事がありました。この祭りは神の使いが諏訪社の神領と目される場所を歩き回るもので、その使いが上伊那に来る時には、帰りに山寺を通って有賀峠を越えて、神社に戻っていました。

今の私たちには、山寺の中を通り道が諏訪へつながる幹線道路には見えませんが、中世では間違いなく幹線道路の一つだったのです。天文11年(1542)に高白斎が山寺に陣を張ったのは、諏訪から上伊那に出る時にこの道を使ったから陣を張ったわけです。祭礼には古い時代の形態が現れます。諏訪社の神事でここを神の使いが通ったのは、中世にこの道が諏訪と伊那とを結ぶ幹線道路の役割を持っていたからでしょう。

残念ながら、江戸時代にこの道は重要性が減少しています。ですから山寺の集落の前を通りていた道は、中世に重要で、近世では必要度が減っていたのです。その接点にあたるのが戦国時代だといふことができるでしょう。



山寺の集落と  
堀の内居館址



## 第5章 歴史の中から



## 武田氏と関所

これまで述べてきたような諸点を踏まえ、私はやっぱり伝説でいう永禄年中（1558～70）という時点は、居館が営まれた期間であろうと思います。

武田信玄は基本的に領国の内部に新たな関所は設けておりません。基本的にはというのは、近世初頭の甲州の中には武田氏時代の系譜を引く、24の関があったといわれているからです。これはすべて国境に位置していて、甲斐国内では廃止の方向に向かっていたようです。このことは富士山上に参詣する道者の関が廃止の方向に向かっていることでもわかります。武田信玄が関所を作る場合には国境、あるいは領国の境目が中心です。ですから長野県で有名な信玄に関係した関所をあげるとすれば、美濃との境目の妻籠（木曾郡南木曾町）、三河との境目の波合（下伊那郡波合村）、小野川（下伊那郡阿智村）心川（下伊那郡阿南町）、帶川（下伊那郡阿南町）など、越後との境目の大網（北安曇郡小谷村）、上野（群馬県）との境目の碓氷峠、仁礼（須坂市）といったものです。甲斐同様に信濃の内部にはあまり置かれていません。

それから、この近辺で非常に有名な関所は辰野町に位置する小野関ですね、別名懸関といわれるものです。これは永禄9年（1566）12月28日に武田信玄が、矢彦神社に対して7年に1度ずつの上人関を認めたものです。この根拠となる文書の確認をまだしていないので何とも言えませんが、場合によるとこの文書は問題があるかもしれません。ともかく、この関所は矢彦神社の御柱をする時に、費用をひねり出すものであったといえます。



矢彦神社

## 関所とは何か

ところで、現在中世史の研究においては、関所の意味があらためて問い合わせられるようになってきました。関所は何のため、何を目的として作られたかが論じ始められています。従来は関の通行者から関銭を取るためだと考えられてきました。事実関銭を免除する文書を武田氏も出しています。

武田勝頼は年未詳の3月に、妻籠に止めておいた商人15人と、荷物20駄を通すように命令しています。ですから1度に商人だけで15人もの集団が妻籠の関所を通ったのです。おそらく戦国時代にはこのようなことは普通で、関所が設けられるような場所は、1日に多くの人数が通ったことでしょう。

よく考えて頂きたいのは、本当に関所を通らなければ次の地点に行けないのかということです。たいていの場合裏道がありますし、迂回路があったはずです。道は必ず一つではありません。また、関所にはすべての人をさえぎることができるほど番兵がいたかというと、そんなことはありません。せいぜい数人程度で、軍事的に通行人を押さえるなどということは不可能だったはずです。また、すべての人から関銭を取っていたかどうかとも怪しいものです。換言するなら、それほど軍事力も置かれておらず、無理をすれば通ることもできるはずの関所で、なぜ多くの人が関銭を払ったのかが問題なのです。

ひるがえってみると、現代の社会で関銭に近いのは高速道路の料金所ではないでしょうか。なぜ皆さんはあそこでお金を払うのでしょうか。そうですね、今どなたかが言われたように、基本的に公團は我々が出する利用金によって新たな道路を作ったり、



道より柵を望む

補修をする代金を生み出しているわけです。でもどうして我々はそれを払わなければならぬのでしょうか。当然ですが、高速道路を使えば一般道路を使うよりはるかに早く目的地に着けるからです。つまり我々はこの金を出すことに納得して、代金を払っているわけです。それでは戦国大名は道作りや改修など、高速道路の公團と同じ役割を果たしていたのでしょうか。残念ながらそのようなことはないと思います。

では戦国時代の人はなぜみんな、関所を通る時にお金う払うんでしょう。これは大きな問題です。また、なぜお金なのか、物ではいけないのでしょうか。こうした問い合わせに対する現時点での解答の一つは、関銭の原形は初穂料（その年に初めて収穫した穀物を、神仏などに最初に奉るもの）だという説です。神がそこを通してやっている、そこで神にお礼として銭を捧げる意識がその根源だというのです。古代や中世には、山を越える時、峠で手向けをしました。神坂峠を始めとして重要な峠ではその時に捧げた幣帛の遺物がたくさん見つかります。これと同じように、安全に通してくれた神への捧げ物が関銭になったというわけです。

小野関の場合にも、神様に対して払うんであって、信玄に対して関銭を払うわけではないんですね。小野の関所のありかたは非常に古い形態かもしれません。ともかく、関銭は取る側だけが問題なのではなくて、払う側がなぜこれに応じたのかも問題にならなくてはならないのです。

### 道押さえのための施設

なぜこんなこと言わなければならないかというと、先程の堀の内の場所が、道押さ



神坂峠（『長野県の歴史』より）

えだとしても、あの程度の規模の居館を根拠にして新たに関税を徴収することは、社会の認識からしてもなかっただろうことを指摘したいからです。一般的な関所の役割を堀の内の館が担った可能性は少ないと思います。

それなら、道の存在を前提にした堀の内の居館は一体なんなのでしょうか。あれはいざという時に、あの前の道を通って諫訪の方に抜ける軍勢を、伊那の側までを見渡しながら監視して味方の軍勢に知らせる役割を持ち、同時に少しでも防御しようという発想で築かれたのではないかと思います。現実問題として、あれだけでは防御はできるわけがないのです。防御できるわけないけれど、こういう発想をするのは、一体なぜなのでしょうか。

これは武田信玄が領国、つまり甲斐も信濃も包み込んだ、自分の押さえる領国を一円的・均一的に道を支配していくという動きの一環だと考えます。つまり、堀の内の居館の存在によって、道を確保しようとしたのです。道を確保すれば、物資の流通とか、それから軍事物資それから人の動きがチェックできます。同時にこの居館から上伊那を監視させることもできるでしょう。これを意図していたんだと思います。

すでに述べた、館の主が地域に関係を持たない様相からすると、この居館を作るには背後に大きな権力の存在がなくてはなりません。永禄年中という時期からすると、それは武田氏である可能性が高いわけです。ところで、武田信玄が本当に戦争している時期では、こんな施設は必要ないし、造るとしたらもっと大規模なものです。それでないと防御はできません。また逆に、武田信玄の支配がうまくいっている時には、あそこで道をいちいちチェックする意味はありませんから、必要がありません。

このように考えると、武田氏の支配がある程度浸透した永禄年中に、先程のような



堀の内主郭部

道押さえの意味を持って堀の内の居館が造られたけれども、その後支配が安定していくようになって、その必要性がなくなったために、館の主はどこかに去っていった。このような流れで考えたらどうでしょうか。

## 信玄のイメージ

皆さんが思い違いをしていると思われる点が二つあります。

一つはですね、武田信玄と勝頼で、どっちのほうが支配がうまかったか、どっちの方が信濃に対する支配が浸透していたかということです。多くの皆さんには信玄だと答えます。ところが実際には、信玄よりも勝頼の時代の方がずっと進んでいるんですよ。例えば北信の飯山は、<sup>ヒガヤ</sup>信玄の段階では一度も支配下に入っていないんです。勝頼の段階になると御館の乱～1578年に上杉謙信の没後に景勝と景虎が家督を争った事件～という上杉家の内紛を元にして、勝頼は景勝に味方をすることで飯山を手に入れたのです。また支配のやり方もどんどん細かくなり、浸透していきました。現実問題として、勝頼の段階では領国の内部はほぼ統一されているんです。支配が均一にされて内部に争乱が起きそうもない時には、いつも上伊那・下伊那の方から攻めてくるかわからないから、堀の内に監視の施設を作ろうなどという必要はないのです。

このことからしても、堀の内の居館に永禄年中に人が住んでいたという伝承はほぼ事実を伝えていて、その伝承そのものが意味を持ちそうです。意味を持つのは堀の内左近という名前であって、名字が福島左近など一般的なものでないこと、つまり地域の人にとってはどうでもいい人だったことです。地域の人間たちがいつも使われる領

調査された堀



主だったら、その記憶は大きくて伝わるはずですし、彼が作った神社の棟札など、何らかの痕跡があるはずです。地元にはいろんな意味で、さまざまな伝承が伝わるはずですけれども、それがまったくないのです。逆に伝承などが伝わらないところに意味があるわけです。

もしそうだとすると、武田信玄は道押さえで重要な山寺の集落の中心部に、装置が造れなかつたということになります。中心部から離れた堀の内にしか造れなかつたことの意味が、すごく重要なのです。

繰り返しになりますが、私だったら堀外・古屋敷の場所に館を造ります。二つの川にはさまれて防御しやすいえに、水もとれます。日当たりもいいので生活環境も良いのです。それに村人を使うのにも便利です。にもかかわらず、そこには造れなかつたのです。

それではなぜここに建築できなかつたのでしょうか。それは村共同体がしっかりしていたからです。村の中には武田信玄といえども手出しできなかつたのです。換言しますと、武田信玄が信濃を治める以前から当然のことながら村は存在し、共同体ができていました。武田氏は郷・村ごとに年貢や普請役をかけますが、これは共同体の存在が前提です。共同体が存在する上に武田氏の権力がかぶさっているわけで、その共同体に対して簡単に手出しあはしなかつた。いやもし手出しあしたら、武田氏自体が危なかつたのです。

私と皆さんの武田氏に対する理解で一番の差は、こういうことだと思うんです。多くの人は武田信玄と聞くと、すごく強大な権力を持っていて、何かあるとすぐ村人を追い出して、居館や城を造ったりすると思いがちなんですけれども、そうじやないの



堀の内より山寺を望む

です。武田信玄は山寺の人達のような領民がいてはじめて生活が成り立つんです。年貢を出してくれる人がいなくなったら、武田氏の生活はできません。

非常に極端な言い方をしますと、我々の戦国大名に対する考え方は二つあります。戦国大名を大変強い権力を持つ者とイメージする場合と、これとは逆にそれほどでないというイメージの二つです。私はそれほどでもないと理解しています。

第2次世界大戦の日本の国家の状況を知っている人、つまり年配の方は強くて当たり前だと思っちゃうんです。なぜなら、國家が人民を好きなように戦争に行かせ、國內では人々を駁聞させる。飛行場を造るってなると、予定地に住む人たちを外へ出してしまったのを見ているからです。自分の経験からして、国家は強いものだ。戦国大名はこれに似ていたのではないかという理解です。

ところが、戦国時代の戦国大名はそんな力があったのか、なかったのかが、今問われているのです。歴史学はある意味で研究者個人の経験を判断基準にしてしまいます。自分の経験から戦国大名をも想像するのですが、実際は戦国大名はそんなに力をもたず、民衆やその集団組織・共同体である村などの上に立っていたに過ぎないです。

## 村への対処

二つの川にはさまれた山寺の中心部に居館を作るためには、この地に屋敷を構えていた百姓たちを追い出さなくてはなりません。しかし、武田氏に反抗したわけでもない百姓たちから家や土地を奪えるでしょうか。決してそんなことはできないと思います。もしそのようなことをしたら、領国の百姓全体が武田氏を信用しなくなり、武田



腰巻といわれる  
腰曲輪

氏の領国支配は不可能になってしまいますからです。

見方を変えると、もし堀の内の居館が私の想像するように武田氏の権力を背景に作られたものだとすると、武田氏は好き勝手に山寺の人達の屋敷を移したりすることはできなかったという、有力な証拠になるのではないかでしょうか。その意味では、現在の私たちの方が権力者に対して弱い立場にあるかもしれません。国が道や飛行場を作るとなると、村全体の移転もさせられてしまいます。ところが戦国大名は、そのような強大な権力をを持つまでにはまだまだなっていなかったのです。

このように考えると堀の内の居館の立地は、戦国時代を考える思わぬ素材になります。

繰り返しになりますが、名字や屋敷の位置からすると、戦国時代のこの地域の領主は山寺さんであった可能性が高いと思います。しかし、武田氏は山寺氏を追い出すことはできなかったのです。なぜならこの当時にあっても、たとえ戦国大名でも敵対関係にない人間の所領などを奪えば、それは社会的に悪い行為と考えられていたからです。武田氏も悪いことをしていない人間を、追い出すことができるほどの力をもち得なかったわけです。もしそれをしてしまったら、世の中が目茶苦茶になります。

ですから、堀の内の居館の主は山寺に所領の一部をもらったかも知れないけれども、基本的には違うところに所領があったと推察します。堀の内の主人は本拠地が違う所にあったから、任命された役割の意味がなくなると、よそに移っていったのです。



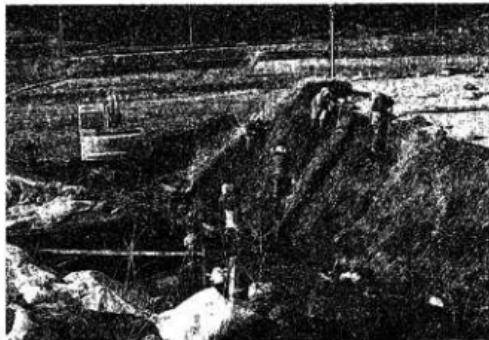
川に囲まれた山寺

## 戦国大名の権力浸透

こういうふうに館の築造の変化があったとすると、戦国の世の中の居館が、昔のように領地を支配するために中心地にあった段階から、武田信玄の意図に従って堀の内の館の主のような者があちこちにとばされるような段階になったわけで、大変な差といえます。つまり、今でいうと会社で単身赴任であそこへ行け、というようなことがされるようになったわけです。このことは戦国大名の力が、大きく伸びてきたことを意味します。

でも山寺の集落の人にとって、堀の内の主はどうでもいいわけです。なぜならば、自分達が毎日仕えているのは、山寺氏かどうかわかりませんが、ここに住んでいた地域の土豪であったからです。地域の領主に仕え、さらに理由もなく別の人には仕えなければならぬ必然性はありません。地域の住民にとっては直接の領主の方が重要なことです。

しかし、仮に武田氏の力を背景にして堀の内の居館が作られたとしたなら、その時に山寺の集落の人々も、普請などに駆り出されたことは疑いありません。また、武田氏でない場合でも、この地域の人がまったく関係しなかったわけではないでしょう。山寺氏と思われる地域の小領主を通じて、地域の人間に動員をかけることは可能だったからです。しかし、山寺の住民は整地したり、堀を掘らされたりしても、日常的に年貢をここに持っていたとはちょっと考えがたいのです。もし、年貢を常に持っていたならば、村の人達にはもっと違った形で館の主の伝承が残っていてもよいと考えるからです。



東西に掘られた堀

館の設置が領地と関係ないとすると、よくよく考えてみると戦国の大転換ともいえます。つまり今までのように、地域の領主が地域を押さえるため所領の中心部に居館を作る段階から、もっと上の権力である戦国大名の道押さえの意図などに従って、特定の目的のために館を設ける段階へと入ったわけです。道を押さえて、領国を均一に支配しようとする発想そのものも、極めて新しいとも言えます。さらに、信州の支配が安定してしまったら、そのような用途の居館が使われなくなってしまった可能性があるわけです。戦国大名武田氏の権力の浸透と、この館の歴史とが連動していると理解できるのです。

### 堀の内館の可能性

このように、私たちの辰野町の、しかも私たちが住んでいる山寺の堀の内から、武田信玄の時期の地域への支配の浸透状況、村の力のありさま、当時の村人が村をどのようなものとして理解していたか、館の中ではどのような生活が営まれていたか、こうした問題が全部見渡せる可能性があるのです。あのわずかな面積からこれだけの事が見えてくるのです。

これから、堀の内の居館跡から何が発掘されるかによって、ひょっとすると中世の人々の生活までわかつてしまうことだってあります。

ただし、私たちと同じような庶民の生活はわかりませんよ。あそこにいるのは一時的に来た、まあいうなれば兵隊の親分さんが、一時的にあそこに住んだに過ぎないのですから。でも武士の生活を通して、民衆の日常生活がかすかに見えてくる可能性は



主郭より山寺を望む

あります。皆さんはたいした遺跡だとは思わないかもしれませんか、ひょっとすると、あのささやかな堀の内の居館跡の発掘から辰野町の歴史全体が見え、さらには長野県全体が見え、もっといとくと武田の時代の特徴が見えてくるかもしれないのです。

## 県下の居館跡

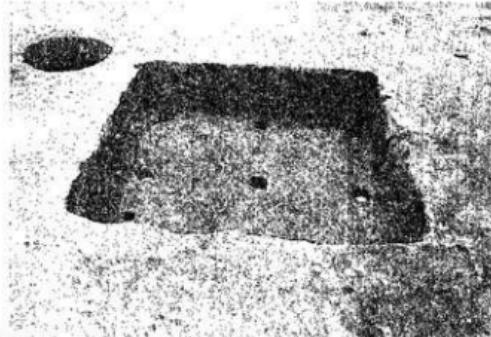
それでは長野県内において、堀の内の居館のような発掘はどのような意味を持つのでしょうか。

居館の発掘はここ数年非常に多くなってきています。発掘調査報告書だけを見ても1985年に駒ヶ根市教育委員会が『青木城遺跡』、1991年に佐久市が『金井城跡』、1991年に大町市が『長畠・清水氏居館跡』、1993年に中野市が『高梨氏館跡』などを出しています。

この近辺で近年多く発掘されているのは大町市で、清水氏の館跡、仁科氏の館跡、森城の近辺など、次々に発掘されています。大町で発掘されているものと、堀の内では随分発掘されるものが違います。大町の場合は本当に長く住んでいる状況がわかるんです。しかし堀の内の館では長く住んでいないということが特徴となっています。

私は米澤県に頼まれて、同じように長野市で掘っている所を見てくれといわれて行きます。長野県にはこのように居館や山城がいっぱいあり、それが次第に発掘されているのです。その一つの典型として、堀の内の発掘も考えられるわけです。

私は松本に住んでいるのですが、松本では地名、地形でおえるような居館の跡はないんです。ところが長野に行くと、地名から明らかに居館といえるものがいっぱいあ



第12号方形空穴

ります。このように、ひょっとすると堀の内という地名の分布からでも、地域の歴史の特質が見えてくるかも知れないので。

辰野町は発掘を通してそれを実行したわけです。堀の内という地名から、居館が出てくる發掘をやってしまったことに意味があります。私にはわかりませんけれども、伊那全体ではどれくらい堀の内地名があって、これと城がどれくらいセットになるかということが調査できれば、この場所の意味も明らかになり、また違う世界が見えてくるかもしれません。

さらにいうと、先程触れた垣外という地名、これも伊那には随分多いのです。地名と地形と全部突き合わすこと、地域の特質が浮かび上がってくる可能性もあります。

このように、堀の内には地名だけでもいろんな研究要素がありまして、それで私も注目しているわけです。

## 辰野町の居館と山城

ところで、堀の内の居館の性格をとらえるためには、辰野町全域の山城や居館を確認しておく必要があります。そこで次にこの点に触れてみたいと思います。

この地域の山城や居館を網羅した本としては、『伊那の古城』や『長野県町村誌』があります。それらに従ってみましょう。

最初に大石城です。この城は別名内城と呼ばれ、大字樋口内城にあります。これは永仁元年(1293)に樋前城から樋口長門守がここに移ったといわれています。天文16年(1547)樋口筑前守光信の時に武田軍によって破られ、天文18年に城は破却されたとい



樋口内城

います。こういう状況からすると、堀内の居館が使われていたという永禄年中には使われていなかったことでしょう。

大石城の前に使われていたという大石城の南に位置する樋前城は、樋口光久が永仁元年以前に住んでいたといわれています。当然戦国時代には使われていませんでした。

大久保山にある小式ヶ城址と、大字樋口山際大久保山にある狐ヶ城址～別名樋ノ沢山の峰へは、ともに大石城主の物見の城といわれています。大石城との関係によって築かれたとすると、造られたのは鎌倉時代ということになり、永禄年中には使われていなかったことになります。

大字平出曲淵の古城は、暦応年中（1338～42）に木曾家村が建武年中（1334～36）の武功によって足利尊氏から本領の木曾と共に伊那郡をあてがわれ、ここに家臣を置いたとされ、その後大隅という者が住んだといいます。木曾家村というのは戦国時代の木曾義昌の祖先だとされ、大変大きな勢力を誇ったのですが、その動きは事実ではなかったと推察されます。その後、天正年中（1573～92）に武田氏の家臣、曲淵莊左衛門尉がしばらく住み、天正10年3月の武田氏滅亡後は以来知行所に引き込んだといえられています。伝承などからすると、この城は永禄年中にも使われていた可能性があります。

曲淵にある曲淵の館跡～別名新城～は、曲淵庄左衛門の居館ではないかといわれています。前の説明からして、武田氏の滅亡後使用されたことになり、永禄年中はなかったと思われます。ただし、地名からすると曲淵氏の根拠はここのようですから、使われていた可能性も否定できません。

大字樋口荒神山には有名な荒神山城があります。武田氏が伊那に侵入した時、筑摩



小式ヶ城址（奥）と  
狐ヶ城址

勢や伊那勢が築いた山城で、後に武田氏の陣所となつたとされます。武田氏が伊那谷に侵入した時に取り合ひがあつたことは確実ですが、伊那谷を完全に制圧した段階で使われたかどうか不明です。しかし、場所の重要性からして、武田氏滅亡後の混乱の時期には改修の手が加えられたと推察されます。

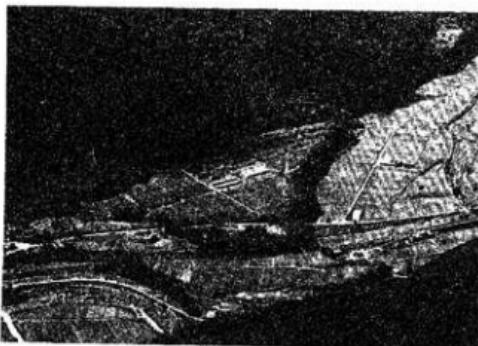
小野押野大洞口には小西城、別名古城と呼ばれるものがあります。これは木曾氏の砦とされます。しかし、木曾氏がこの地にまで勢力を張ったかどうか疑問があります。また、草間肥前・草間備前の砦ともされます。この人物は名字からすると府中の小笠原氏の家臣のようです。22メートルかける10メートルの本郭が中央にあり、周囲に土塁の一部も残っています。空堀を隔てて郭が続く連郭をなしています。城の残り方と伝承からして、武田氏の侵入時に用いられ、その後も使われたようです。

小野押野には草野の古城があります。山頂に円形の平地とわずかな堀跡、土塁が残っています。これは草野氏の砦といわれています。

大字横河一ノ瀬に市川城（別名河城・横川城）があります。これは50メートルかける20メートルの単郭です。郭からして、戦国時代にも使われた可能性があります。

大字上島町屋には大庭城（別名横河城）があるといわれるのですが、場所が不明で実態も不明です。

大字伊那富宮所城山には竜ヶ崎城があります。本郭の南に空堀を隔てて二つの郭が残っています。北に三つの堀があります。主郭は中央が低く、周囲に土塁が残存しています。武田氏が伊那に侵入した時に小笠原長時軍が守った山城です。麓の館は、天正年中（1573～92）に中西丹後が住んだとも言われています。この山城が戦国時代に使われていたことは確実でしょう。



大庭城址伝承地

大字伊那富宮木には天白の古城があります。伝承や古文書によると、戦国時代末の弘治年間(1555~58)に宮木の矢島勘六とその子勘兵衛が住んでいたが、天正年間に織田氏の侵略にあって民間に下ったとされています。このことから、戦国時代に用いられたと思われます。

大字伊那富羽場には古城があったとされます。城跡としての遺跡・遺物は不明です。武田氏が伊那に侵入した時、小笠原氏の旗下の草間肥前がここで防ぎ、戦ったといわれています。後に柴氏が居住したとされます。すると、永禄年中にも利用されていたことでしょう。

大字辰野唐木沢には陣場ヶ原城がありました。遺構は残っていません。義仲の家臣の砦跡とも、諏訪の金刺氏と木曾氏の間道の宿点とも伝えられています。木曾義仲については確定ではないといえます。戦国時代には使用されていなかったと考えます。

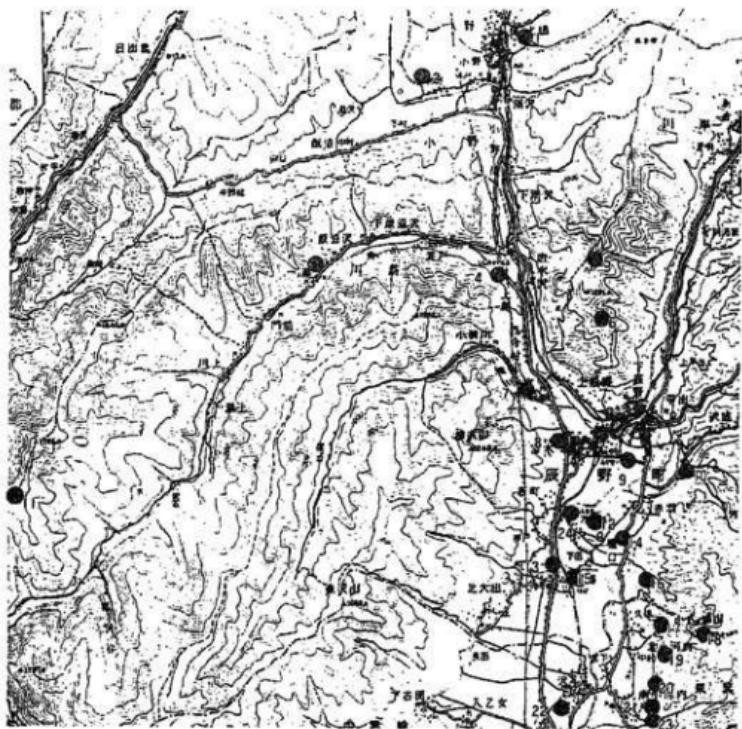
同じく大字辰野唐木沢には大城山の城があります。主郭は55メートルかける13メートルで、空堀が残っています。空堀が残ることから、戦国時代に用いられた可能性があります。

さらに北小野の畠ヶ中の館跡は今井氏の館跡とされます。これも戦国時代ではないでしょう。

この他、特に2つをあげましょう。



小西城



- |            |             |          |           |
|------------|-------------|----------|-----------|
| 1: 上田館     | 7: 城山(竜ヶ崎城) | 13: 羽場城  | 19: 城峯    |
| 2: 小西城     | 8: 天白の城     | 14: 橋口内城 | 20: 豊久保   |
| 3: 市河(横河?) | 9: 古城       | 15: 羽場城  | 21: 日輪寺城  |
| 4: 大庭(横河?) | 10: 堀之内     | 16: 鳴城   | 22: 古城    |
| 5: 阿場ヶ原    | 11: 濑戸城     | 17: 寺山   | 23: 上の平城  |
| 6: 大城      | 12: 荒神山     | 18: 小式が城 | 24: 新町原田南 |

長野町城館跡分布図

## 瀬戸城

辰野町で最も古い山城と目されているのが瀬戸城です。ひょっとすると後でおしかりを受けるかも知れませんが、瀬戸城は明らかに山城ではありません。あれは地滑り地形です。でそれはどういう事かというと、私たちが山城を見ていく場合、例えば一番上の郭に対して、この郭はどういう意味を持っているのか、この道とこの郭はどのような関係になっているのかなど、地形や郭の配置など全部説明がつかなければならないんです。城は目的を持って作られていますから、一つ一つみんな理由がないといけないんです。

瀬戸城は非常に大規模です。武田信玄でも造れない程大きな面積です。ということは、木曾義仲が武田信玄よりはるかに大きな力を持っていたという前提でないと、あのような城は造れないはずです。でも、義仲は逃げて来て、木曾の山中に寄宿しているに過ぎません。木曾に住んでいた時期の義仲は、本人としては特別な権力を持っていないんですね。またその背後の木曾の生産力を見ても、信濃と甲斐を合わせた武田氏の方が当然のことながら、大きな経済力があったわけです。その武田氏に築けないのに、はるか以前の義仲がこれを築いたとするのはばかげた考えといえるでしょう。

それに1760メートルという標高ですよねえ、あそこに城を造っても一体どういう意味があるか、木曾の道を押さえるためか、軍事拠点かなどと考えても理由付けできないんです。つまり科学的な状況でいったらほとんどわからない。もっと言うと木曾義仲段階のこれほど大規模な山城は、日本で一つも見つかっていないんです。ですから、瀬戸城については再考の余地があるといえます。



南北に掘られた堀

## 羽場城

興味深いものに、大字伊那富羽場の羽場城があります。これは前回ここに来た時に初めて係長さんに連れて来てもらった城です。これはものすごい城ですね。聞いてみたら町の文化財にもなっていないとのことですが、これは県史跡のレベルまでいくかもしぬない大変に見事な遺構です。この城は北側に天竜川が流れていて、絶壁になっています。中心部は現在はお宮になっていて、主郭の南西を飯田線が走っています。さらに主郭からはずれたところに大変大規模ないくつかの土塁の跡が残っています。

伝説では戦国時代の末に未完成のままで放置され、文禄年中に小笠原氏が住んだとのことです。実際見たところでも、一時期は外側に残る土塁全部がセットになって大変大きな城が造られようとしたと思います。しかし城が造られないうちに、現在お宮になっている非常に狭い部分だけが居館として用いられるようになったと推察されます。

私はまだ辰野町の中をしっかり歩いていないのですが、少なくとも羽場城は堀の内以外で非常にいい状況で残っている遺構の一つだと思います。特殊ともいえるほど見事な遺構です。

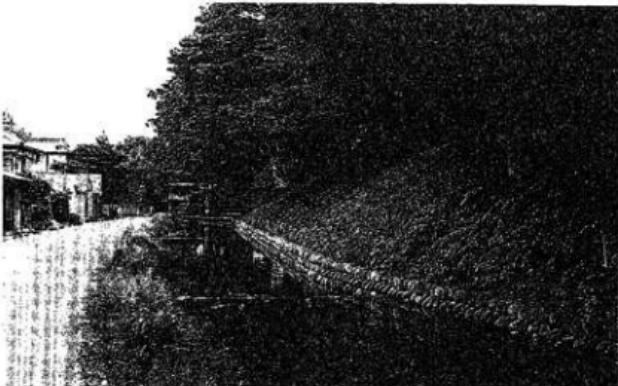
お宮の周囲に残る空堀は幅10メートルぐらいありますかねえ。深さ7メートル以上もあり、ものすごく見事なものです。今私たちのまわりで県史跡になっている居館跡として有名なものは、佐久市の伴野氏居館跡、それから中野市の高梨氏館がありますが、堀の規模や残り方は間違いなくこれらよりいいでしょう。

でも居館としてぱっと出てくるのはこれくらいしかないんですね。残りはみんな山



羽場城

城なんですね。しかもその山城は、だいたい武田氏滅亡の後使われているものが、現在に残っているんです。そうすると、面白いなあと思うのは武田氏が一番支配がうまくいっている時期には山城の装置をほとんど造らなくって、ああいう居館みたいなもので押さえるような状況だった。それも武田の支配がうまくいけばなくなってしまう。その後また大きな混乱がおこると、その時に改修されたわけです。



作野氏居館跡



高梨氏居館跡



## 第6章 おわりに



## 山城をめぐって

長野県人あるいは日本人にはいまだにちょっと思い違いがあります。それは、山城は武田信玄が攻めてくる前に非常に多かった。武田信玄が攻めてきた時期に武田軍に備えて大きく手直しされ、最後に武田氏が手を入れたというものです。換言すると、信玄の時代で山城は終わっているというのが一般的な言い方なんです。

ところが私は、中世の山城は、ずっと後まで使われていて、元和元年(1615)の一国一城令と呼ばれる法令が出るまで、造り返されていた可能性があると考えています。山城というのは戦闘用の場所ですから、基本的には武器なのです。武器は常に最新の物に変えられねばなりません。古い武器と新しい武器とで戦えば、新しい武器を持っているものに負けるのが当然ですから、それに対応するように山城も作り返されいかなければならぬのです。したがって、だいぶ後の時代まで山城には手が加えられているのです。実際には、古い山城は古い形態のままでほとんど残っていないのです。

その上でなおかつ言っておきたいのは、武田信玄の時代には山城はあまり造られていないということです。長野県でも山梨県でも、武田氏の段階よりも武田氏滅亡後の混亂の中で山城が改修されたり、造られている例が多いのです。少なくとも現存の山城は近世初頭のものだと意識した方がよいと思います。

皆さんもご承知のように、戦争は権力が強いものの同士が戦った方が大きな戦争になります。山城も時代と共に新しくなるのです。これも常識です。じゃあこの近辺で大規模な戦争が行なわれた可能性があるのは、またそれに備えなければならなかつたのは、いつでしょうか。権力が大きくなればなるほど戦争が大きいとすると、武田氏が



ホウゲの調査

この地域を攻めてくる時の武田氏の権力と、この地域の権力との戦争はたかが知れたものですね。その後武田が滅亡する時は織田氏対武田氏なんですね。武田氏は領国の大さはたかが知れたものですし、この時にはまともに戦っておりません。ところが、その後本能寺の変で織田信長が亡くなってしまうと、豊臣秀吉と徳川家康が天下をかけて争い、地域の領主の戦いの背後にもこの二つの権力がつくことになります。また、武器も以前より進歩していました。

したがって、信濃においても武田氏が滅亡してから、天下統一がされるまでの期間に、最大の戦闘に備えるための山城が築かれたのです。

### 地域の見直し

ともかく、これまで見て来た状況からすると、武田氏の時代にあっては山城はそれほど重視されなかったようです。また辰野町の中でも、武田氏が山城を積極的に設けた形跡はありません。それなら、堀の内はどうでしょう。

辰野町にとっての主要な道路は一体どこであったのでしょうか。それを考えると少なくとも中世の一定度の時期まで、堀の内の前を通る道が重要だったといえます。それから、山寺の集落は戦国時代にはきわめて独自な共同体を持っていて、いざとなったら武田氏すら中央部に居館を造れなかったとするなら、私にとっては大変痛快です。そのことは逆に言うと、今までの信玄像がいかにおかしかったか、つまり従来は桟道みたいなものを造ろうと思ったら、ぱーっと造れるという強大な力を持つ信玄のイメージがあったのですが、これも事実とは異なります。



越道より堀の内を望む

そうなってくると、この地域をじっくり考えていくことが、日本全体を全部見せてくれる大きな鍵になってくるんです。今まで私たちは辰野町、さらには山寺から辰野町を見た場合には、いったい何かいえるのかっていうことを考えていなかったのです。山寺から辰野町を見た場合には、今の中心地が中心地でなかったことがあるかもしれないし、近代まで辰野町というまとまりは当然なく、どういうルートを通って諏訪から伊那に行くのかが、非常に問題だったと思われます。そのルートの一つに堀の内の前を通る道があったわけです。

それなら、なぜ山寺を通っていた道は重要性が減じたのでしょうか。当然のことですけれども、中世の道は直路ルートが多いのです。旅人は全部歩いていきますので、最短距離をとろうとしたのです。ですから高いところであろうが低いであろうが、アップダウンを気にするよりも距離を稼ごうとしました。山梨の場合でも古い道の方が谷や山を直線的に結んでいます。

ところが馬などを使って大きな物資や、大量の物資を運ぼうとする場合には、アップダウンがあるととても不便になりますから、できるだけ平らな道、距離があつても通りやすい道を通ろうとします。つまりその段階で道そのものの機能が変わっていきます。そうなると古い道は使われる率が減ってくるのです。しかし、諏訪社の遷堪神事で大分後まで山寺を通る道が利用されているのは、信仰を前提にして古い形態が残っていたから、この道が使われたのです。日常は和服を着ないのに、神事に際しては和服を着ることが現在でもあります。私たちの前に通っている道が、実はこんなことまで教えてくれるのでした。



道より見た堀の内

## 中世の景観

すでに述べたとおり、塞の神という地名からも村が一体どういう意識であったのかがわかります。私たちの地域は実に平和な地域であるということが前提で、両側に神様がおかれ、その回りは山に囲まれて、この山もどちらかというと川と同じようにあの世につながるものですね。こういう非常に見事な空間意識を、この地域は示しています。

私が最初に山寺に来たときに感動したのは、景観でした。歩いていきますと、地域の開発が沢にそって水田が広がっている状況が読み取れるのです。こういう風景は小さな権力が分立した中世的なものといえます。なぜならば、谷沿いの小さな開発は権力があまり大きくななくてもできます。古代の律令体制の班田が行なわれているところは、広い平野で国家が基盤になって条里制をひきます。ところがこの地域の場合だったら、開発は小さな権力が沢の水をシャットアウトする事によって、狭いながらも水田が開けます。これが谷田といわれるものです。つまり比較的地元の、たいした権力のない人たちが水田を作る時には、こういう開発が最も簡単な方法なんです。

今日の堀の内の場所は江戸時代に水田開発がされた場所ですけれど、今の日本では全国的に圃場整備が進んで、あのような景観、段々畑や千枚田の小さな景観や地名が消えているのです。全国が辰野町と同じような方向にあるわけです。でも地名や地形は人間が一生懸命開発した結果としてでき上がった歴史の成果なんです。山寺に来たら、二つの小さな川にかこまれた大地の上に家がいっぱいあって、平和な場所であるために塞の神が設けられているということになれば、これは中世の最も典型的な風景



谷田

につながります。水田の開き方もそういうものに直結しているのです。

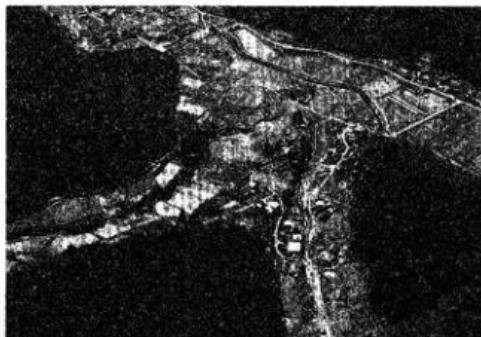
もしこのように考えることが許されるなら、私たちのこの場所から中世の世界が発信出来る可能性があることになります。

## 伝えることの意味

思うに、観光地で有名な長野県内の姿庵（木曾郡南木曽町）や奈良井（木曾郡横川村）は、古い建物をそのまま残したために、ものすごく大きな財産になっています。

現在、日本全体で圃場整備がどんどん進んで、従来の歴史的な景観が急速に失われています。はっきりいって私は圃場整備に反対する者ではないんです。生活のために道をつけたり、圃場整備することはどうしても必要なことだと思います。私が言いたいのは、歴史的な景観を壊すことによって何が失われていくか、ということを皆さん知つていれば、同じ壊すにしても将来の影響が違うということなのです。皆さんにとって堀の内がこれまで私が述べて来たようなことを考えさせる、日本でも有数な居館の跡かもしれないということを実感していれば、後の子供達の歴史意識や郷土意識に、良い影響を与えていくだろうと思います。

今日私が感動したのは、おばあちゃんが堀の内の見学をしながら、「ここは昔の人が住んでいた場所で、こういうことをよく覚えておきなさい」と、小さい子供に教えていたことです。これは大変すぐれた教育だと思います。文化を伝えていくのは皆さんで、皆さんが次の世代に伝えていかねばならないのです。我々は堀の内をやむにやまれぬ理由によって圃場整備をしたけど、あそこの下には日本の中世を考えさせた物が



堀の内遺跡

あったと記憶して、伝えていく必要があるのです。

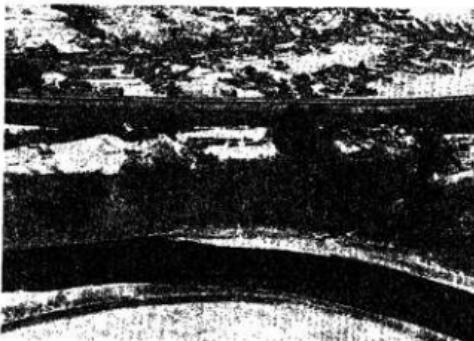
もしそうでなく、幸いあのままでもし残ったら、堀の内は圃場整備することになっていたけれども、自分たちは文化を残すために経済的な不利を承知で、あそこを残したんだと胸を張っていきことができるかもしれません。

## 武田氏の城の特徴

武田氏統治時代に山城が積極的に築城された形跡は薄く、むしろ領域支配のために、平城が造られ、地域支配のために人が配置され、道などが掌握された可能性があります。

長野県の中に残る武田氏が造った一番典型的な城は、伊那では大島城(下伊那郡松川町)、天竜川の横の河岸段丘上に出ている大島城です。それから中信では松本の深志城、信州新町の牧ノ島城。北信では長野市松代の海津城(松代城)。それからさらに北の方へいって長野市の長沼城があります。

この中では牧ノ島城が一番よくわかりますが、牧ノ島城は犀川の蛇行している所に突き出た段丘に、いくつかの郭を設けた城です。この城の全面に長野と松本をつなぐ重要な道路が走っているわけでもありませんし、この地域は平野で大きな生産力がある場所でもありません。それなのに大変大規模な城を造ったのです。何のために造ったのかよくわかりませんが、この位置からしておそらく川の流れを押さえる、つまり流通を押さえるために造った城ではないでしょうか、もしそうすると、他の事例としてあげた城も全部川沿いにあることは示唆的です。当然川が防御に使われたことは疑



牧ノ島城

いありません。しかしそれだけではないはずです。

流通を押さえて防御をしよう。あるいは流通を押さえて経済面を押さえようとする発想法があったとするならば、先程の堀の内の館のあり方と余部つながっていきます。武田は流通に着目していた。その流通路が、堀の内の居館の前を通っていたかもしれませんのです。しかもそれは全部平城・平山城であって、山城は造られていないのが特徴です。

これまでに書かれた戦国時代に関する信州の本を読んでみると、武田の時期の山城だとか、小笠原長時時代の山城だとかいっぱい出てきますが、先程も述べましたように、武田氏時代とは一線が引かれそうです。そして、地域支配のために人が置かれ、単身赴任みたいな人が出てきたと言う意味で、武田の時代はそれ以前とは違うなあと思います。

## 公の権力としての武田氏

このようなことを、少し違う側面からいいますと、先程関所は元々は初穂料みたいなものを取るところと指摘しました。なぜ領主側が関銭を取れるかといえば、これは安全料だと思うんですね。つまり金を払う側からすると、関所で関銭を払えば、次の関所まで安全に行ける、関銭を取ったものに保護してもらうのが当たり前だ、という事が最低条件なんですね。

武田信玄みたいな領主・権力が、支配される民衆の側に対して何を負担しなければならないかが問題にされなくてはなりません。それは公の側面だと考えます。私は武



海津城

田信玄の施策は見事に公権、公の権力を示していると思います。

例えば松本で、武田勝頼の時期に村の間で入会に關係して争論がおきました。領主によって入会山に入れなくなった小池という集落の人たちが、勝頼のもとに「裁判してくれ、裁判してくれ」って出掛けていったんです。何度も追い返されるんですが、最終的には裁判がされます。この時、勝頼は湯村で温泉に入つました。湯村温泉というのは皆さんご承知ですよねえ。あそこで勝頼は温泉に入つたんです。

いうなればですねえ、吉村知事が湯田中かなんかの温泉につかっているところに行つて、「会ってくれ、会ってくれ」というのと同じです。この場合、皆さんは知事が私に会つてくれると思いますか。私ははっきりいって会つてくれないと思います。あるいは村山首相が温泉に入つて休んでいる所に、この町の教育委員会の福島さんあたりが、何も約束を取りつけないで行って、「堀の内整備のための陳情だから会つてくれ」って言つたって、会つてくれないことでしょう。

にもかかわらず、武田勝頼は会つちゃうんです。会つて即座に裁判して、こともあろうに入会に入らせないようにしていた、自分の親戚を負かしてしまったのです。裁判はどうしたかというと、現地に家臣を派遣して調査させるなどをした上で、関係者の証言を聞いて判決を下しています。この裁判費用は勝頼が負担するんです。勝頼の方が全部チェックした上で判定を下したのです。しかも、自分の親戚、私の方に罰をしたんです。

おそらく今の政治家の方がよっぽどひどいですよね。今の政治家は圧力をかけて、だいたい自分達が関係しているものは全部勝訴しちゃっているように見えますからねえ。大きな事件で判決が長引いた上で、最高裁まで持つていけばほとんど民衆が負け



長沼城

ています。それから見たら、戦国大名の武田勝頼の方がはるかに公正だと思います。

戦国大名である武田勝頼にとっては、まず民衆のことを考えなからず、自分がいつ潰されるかわからなかったんです。存在する意味のない領主は民衆からも見放されることでしょう。そうすると、公的な側面として具体的に何がいえるかというと、信玄堤といわれる治水がその代表です。治水を行なうというのは～信玄堤をなぜしなければいけないのかは～自分の領地の安全を確保するというよりは、他人の領地であっても公のためにしなければ、いけなかつたからです。本来年貢を取るということは、それに見合うだけのお返しをしなくてはいけないです。税金や年貢は出す側からしたら、保険のようなものだと思います。

棒道はおそらく通説の方が間違っているのでしょうか、道を造るということ自体は、小さな共同体や権力ではなしえない大規模工事を、全体に号令をかけてやることだと考えます。道を押さえることは、一見すると武田氏のためでしかありません。でも見方を変えてみると、通行する民衆に道の平和を維持してやるためにともとれます。そうすると武田の公権としての側面が非常に鮮明に出てきます。後に織田信長は関所を撤廃する方向に進んで行きますけど、あれも公の側面です。

だから今までのように、戦国大名は思うがままに好き勝手なことをしている、できただと理解していると大間違いで、実は主役はあくまで民衆なんですね。おそらく信玄の方は何も手出ししなかつただろうけれども、山寺の集落の中央部分に居館を造るぞと言ったときに、山寺の人達がだめと呉ったら、信玄はすごすご引き帰った可能性が高いのです。もしそうだとすると、戦国像が大きく変わる可能性を堤の内の居館跡が示すことになると思います。



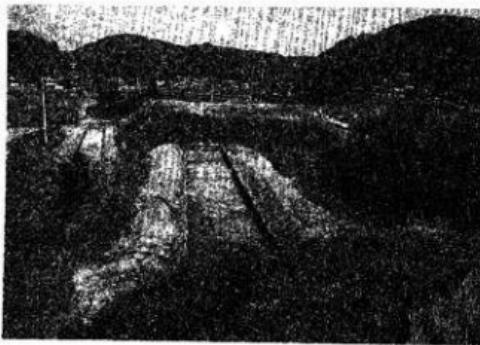
天狗社跡より堤の内を望む

## 新たな研究のために

堀の内の居館は永禄年中、武田氏の支配が強化された時期に造られ、領域支配、つまり信州全体、武田領地全体をいかに支配していくかという意味を込めて、武田氏が主体となって人が配置された可能性が高いというのが私の結論です。高いとしかいえないのは武田の古文書には、一点も山寺に関係するものがないからです。周囲の状況からするとそうでしかないと思うのです。

ところが、私が今までここへ来ていっていることが、発掘結果によって何度も覆されたことか。掘るたびに福島さんは違うものを見つけ出します。これ以上掘らなければ、私の説でいいなあと思いながら見ていると、予定と違ったものを掘り出します。これが学問なんですね。考古学のすごさというのは、あの地中から次々と從来知られていなかったものを掘り出し、評価づけをしていく点にあります。その意味で、皆さんが知っている教育委員会の福島さんは、大変すぐれた発掘能力をもっている人だということを認識していて下さい。

でも私に言わせると、一番いい方法は堀の内の居館跡を発掘しないで残しておくことです。100年後の人は多くの経験を積み、研究の進歩もあって、もっといい発掘をするはずです。ところが今の状況でいったら緊急発掘せざるをえない。もっと言えば、これが圓場整備のためだとしたら、時間が限られていますから、発掘はいやでも制限を受けます。時間的な余裕のある研究調査の発掘だったら、もっとやり方が違ってくる可能性があります。堀の内の居館跡から発掘される遺物を素材にして考えていくこ



堀の内試掘風景

とは、まだまだ無限の可能性を持っているかもしれないのです。無限の可能性を持っている遺跡の、地名が残り、地形が残り、発掘が残っていたならば、本当は日本にいろんなことを発信できる可能性があるわけです。

発掘したら何も出なかった、ということにもなるかもしれません。しかしこれも結果なんです。遺物が出なければ、なぜ出なかったかを考えればいいわけです。出たら、なぜこれが出了か考えればいいわけです。その意味でのすごい可能性が、堀の内の居館跡にあるわけです。

繰り返しますが、堀の内の居館跡に関係して一番すごかったのは、教育委員会の人だったと思います。よそだったら、あそこはあのまんま何も言わずに圃場整備が終わっちゃったことでしょう。それは当たり前の話なんですよね、もし遺跡を大事にすれば教育委員会がよその部と衝突する事になります。

でもその時に100年先200年先を考えたら、ここでストップをかけて勉強させてもらったり、地元の人達にお返ししたいって事を考えたのが、この教育委員会の人達だと私は思うんです。すごいなあと思ったのは、地元の人達に「堀の内」という、訳のわからない小さな冊子を次々に配ってくれるでしょう。あんな事ができる市町村はそうはないですよ。普通だったらああいうことは、しなくともいいわけです。だけど広報努力を次々にやってくれていることは、大変な努力だと思います。ですから私たちにとって、教育委員会の動きは、よその市町村に対して誇れる動きです。

主郭部全景

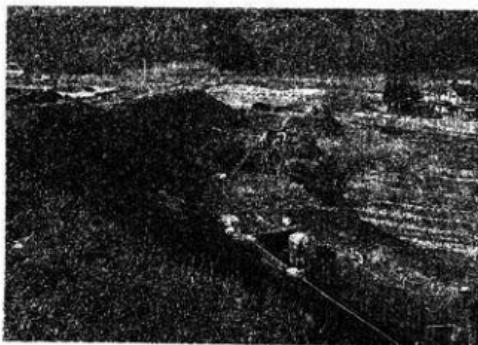


## 地域の文化財

文化財っていうのは、仏像や建築物、遺跡だけじゃないんですよね。私が最初に知ったのは堂平にある池の、あそこに竜がいたという伝説でして、辰野というのはおもしろい所だなあと思ったんです。伝説そのものも文化財、地名も文化財だし、人間の営みがすべて文化財になるんです。どこにもある石垣一つとったって地方で特徴が見られ、古い石垣もあるし、新しい石垣もある。それも文化財なんです。今は水田が放置され、石垣のある田圃には目もくれなくなりましたが、今だからこそ石垣の調査をしたらどうかと思っています。

だから私たちが何から学べるかという事を、もう一回意識しなおすと随分違った世界が地域からも見えてくるはずです。今私たちはたまたま、堀の内の居館跡を通して文化財としての地名と、発掘ということを通して学んでいるけれども、これも一つの手段にすぎないわけです。

でもよくよく考えてみてください。堀の内の事を一番知っているのは、皆さんなんですよ。今日も堀の内の居館跡で、「崖が崩れたときに内耳のかけらがここから出てきた」と言っている人がいました。あの情報一つで我々の発掘方法が変わってくるんです。あそこで穴が出た、内耳鍋を拾ったという情報は、大変重要なんです。私なんかがいくら文献を読んだところで、地元の人間ではないんで、例えばここが冬零下何度になって、夏どのくらいになるか、また住みやすいのはあっちか、こっちかなんてまったくわからない。そういう事を含めて地域の人が知っていることはすべてが文化であり、認識しなくてはいけないことなのです。私などは、そういう事をもう少し大き



裏曲輪

くして見た場合に、ひょっとしたらお役に立てるかもしれないという程度なのです。

発掘はまだ始まったばかりです。あそこに対する知識はまず福島さんに、「おおこんな事もある」、あるいは「あそこの所で誰々が、内耳の破片を拾った」などという情報があれば、どんどん持つていって欲しいものです。そうすると福島さんはものすごく能力のある人だから、全部組み込んで発掘をやっていくことでしょう。

係長さん達にお願いして、沢底の水田一つ一つに昔の水田はどっから水が来て、この田とこの田はどのような関係になっていたか。そういう事を調べてもらっています。そういう皆さんに持っている情報すら今私たちのところに入ってきません。信州大学の学生の中には、うるち米ともち米の区別が付かない者もいます。水田を見てどこが田の口か、入口の所の稲が枯れてもこれは一体何だという理由はまったくわからない、これは明らかに知識の欠如です。そういう中で、皆さんにお持ちの情報を我々の持っているものとくっつけ合わせていくと、必ず次が見えてくるはずです。ですから、そういうことを次々教えてください。

### 疑問を抱く心

もう一つ今までの話の中で堀の内居館、これだけをとっても戦国のイメージが随分違ったことでしょう。イメージが違うようにできるのが、あるいはしていくのが学問であり、次の文化を育てる事なんですね。歴史も同様です。

ここにいる人達はそんなことはないと思うんですが、歴史が嫌いだという人が意外と多いんです。その場合の歴史のイメージは、年号を覚える点に特徴があります。暗



堀の内構図

記の学問の典型が歴史だと理解しているわけです。ところが、私は頭が悪くって年号をまったく覚えられないんです。大学の教師なのに何でこんなに頭悪いんだろうというのが、私の自慢なんです。

逆にいいますと、頭が悪いからこれもわからんあれもわからんと、真面目に考えちゃうんです。ですから本当に勉強したい人は、「これなあに」って言えるのが一番いいのです。私たちも子供の時には、皆「これなあに」っていう質問をもっていました。段々年を取るとともに、「これなあに、どうして」っていうのが恥ずかしくなります。今後は、「これなあに」って聞けるような、雰囲気を作るべきです。そしてその質問に對して皆で真剣に考えていくけば、もっと学問の新しい側面が見えてくると思います。

頭がよい人のイメージも、今までだったら何年に何がありました。あそこに誰々がいましたっていうように、暗記量が多いことが指標とされてきました。でも私はそうは思わないのです。一番簡単なことを聞かれると、私たちは大抵答えられません。「何で信玄は生まれたんだ」って言われたら、これ、信玄が生まれたって、母親が産んだから産まれたんではなくて、歴史的に何で生まれたか、これに答えるのは難しいですよねえ。

このように、非常に個別具体的な問題、根本的な問題を我々は本当ににも解決していないのです。皆さんがもっと素直に、なぜ堀の内の居館はあそこでなければいけなかっただのかを、私は今日あんな説明をしましたけれども、しっかり考えれば違う解答が出てくるかもしれません。いろんな可能性のなかで、我々は学問を進展させていかなくてはならないです。皆さんのお持ちの武田信玄あるいは戦国のイメージも、これからどんどん変わっていくだろうと思います。また変えていかなくてはならないの



山寺より堀の内を望む

です。

さらに言うと郷土を知ることは、そういう基本から始まると思います。

## おわりに

私にとって歴史の出発点は、「私は一体何だろう」と考えることです。「私って一体何だろう」って考えていった時、最後にたどり着くのは、私の先祖は、私の生まれたところはという問であり、それが郷土史だと思います。また、それが郷土に対する愛着だと考えます。

郷土を考えもしないで、日本全体の事を覚えて、あんまり意味がありません。変な言い方をするようですが、首相の名前をいくら知っていても、隣のおじさんの名前を知らなければ、これは少しおかしいですよねえ。隣組の付き合いが出来なくて、北海道の状況をよく知っているのでは、ちょっとおかしいですよねえ。

その意味で、私たちは辰野町のこの山寺に生きている人達は、山寺のことを徹底的に知って、そして沢底を知り、辰野町をわかって、長野県の知識を持つ順番でいいと思うんです。私たちが教科書などで教わってきたことは、日本を知ることではあったけれど、長野県のこととも、山寺のこととも知らなかった。しかし、日本のことを知っていれば頗るいいと評価されたのです。これは明らかにおかしいですね。教育の荒廃もここに起因するかもしれません。

その意味で繰り返しますが、壇内の内居館跡はすばらしい文化財ですが、教育委員会だけがいくら一生懸命やったってダメです。地元の人達次第、地元の人達がどれく



現地説明会

らいここに学ぼうとするかだと思います。

私が文化財保護審議委員をやっている時も、例えばどことこの山城を指定したいついでいう時には、教育委員会の方から保護についていってくるのを待っているしかないんですね。教育委員会を動かすのは皆さんなんです。今日の見学会や講演会だって、今日こんなに入人が集まつたし、内容も本当によかったです～もちろん福島さんの説明ができますよ～という話になつたら、他の人も連れてもう一回見に行くじやあねえか、となつてきたりいいと思います。で堀の内の居館跡を、どうやつたらもっと後世の人たちに伝えていくことができるのか。教育委員会は教育委員会、地元は地元の人でもう一回練ってみようじやねえかとか。そういうことを是非お考えいただきたいと思います。

今日は私の原稿からはずれ随分話が飛びましたが、いえることは山寺が本当にわからなければ、辰野町だってわからない点があるということです。ひょっとすると堀の内の居館のことがわからなければ、戦国大名武田氏の実態がわからないとなれば、我々も痛快だし、将来の文化財としての価値も大きくなると思います。これだけじゃない、まだ他にもいっぱい目をつけなければいけないことがあります。こんなところで今日の話を終わらせて頂きます。

## あとがき

本書は、平成6年12月4日に沢底区山寺集会所で開催された、榎本先生の講演会をまとめたものです。この講演会は、辰野町における堀の内遺跡の歴史的価値を、いち早く見抜かれた先生の発案によって実現しました。

我々は時として身近に存在するがゆえに本当の価値というものが判断出来ないことがあります。その価値を、もう一度気づかせていただいた貴重な経験が、この堀の内遺跡ではなかったかと思います。

残念ながら堀の内遺跡の居館址は姿を消すこととなりましたが、この遺跡が残したものにはばかり知れないものがあります。その一つが、榎本先生との出会いであったのかも知れません。先生は長野県の文化財保護審議委員としても活躍され、公私共に非常に忙しいにもかかわらず、精力的にこの遺跡のために足を運んでいただき、貴重なご指導をいただきました。このご指導は、これから辰野町の遺跡調査において多大な影響を与えていくと思われます。

近年、学問の学際化ということがいわれています。中世の居館址の調査として、堀の内遺跡の発掘調査もその学際化の一つの方向性を示すよい機会ではないかと考え、今後さらに堀の内遺跡を中心とした学習をしていかなくてはならないと考えています。

地域の歴史は、地元の人間によって解明される、という先生のお言葉に代表されるような、非常に示唆にとんだ、そして2時間という長時間でありながら、聞く者を飽きさせない講演をしていただいたことに感謝の意を表しながらあとがきとします。

辰野町教育委員会

教育長 小澤 幸彦

## **堀の内中世居館跡をめぐって**

---

平成7年3月31日発行

編集発行 辰野町教育委員会  
長野県上伊那郡辰野町中央1  
電話 (0266) 41-1681

印 刷 ほおづき書籍株式会社  
長野市柳原2133-5  
電話 (0262) 44-0235㈹

---

西周同書館  
卷本正治  
代寄贈

伏見の内居館跡付図

**堀の内居館跡付図**



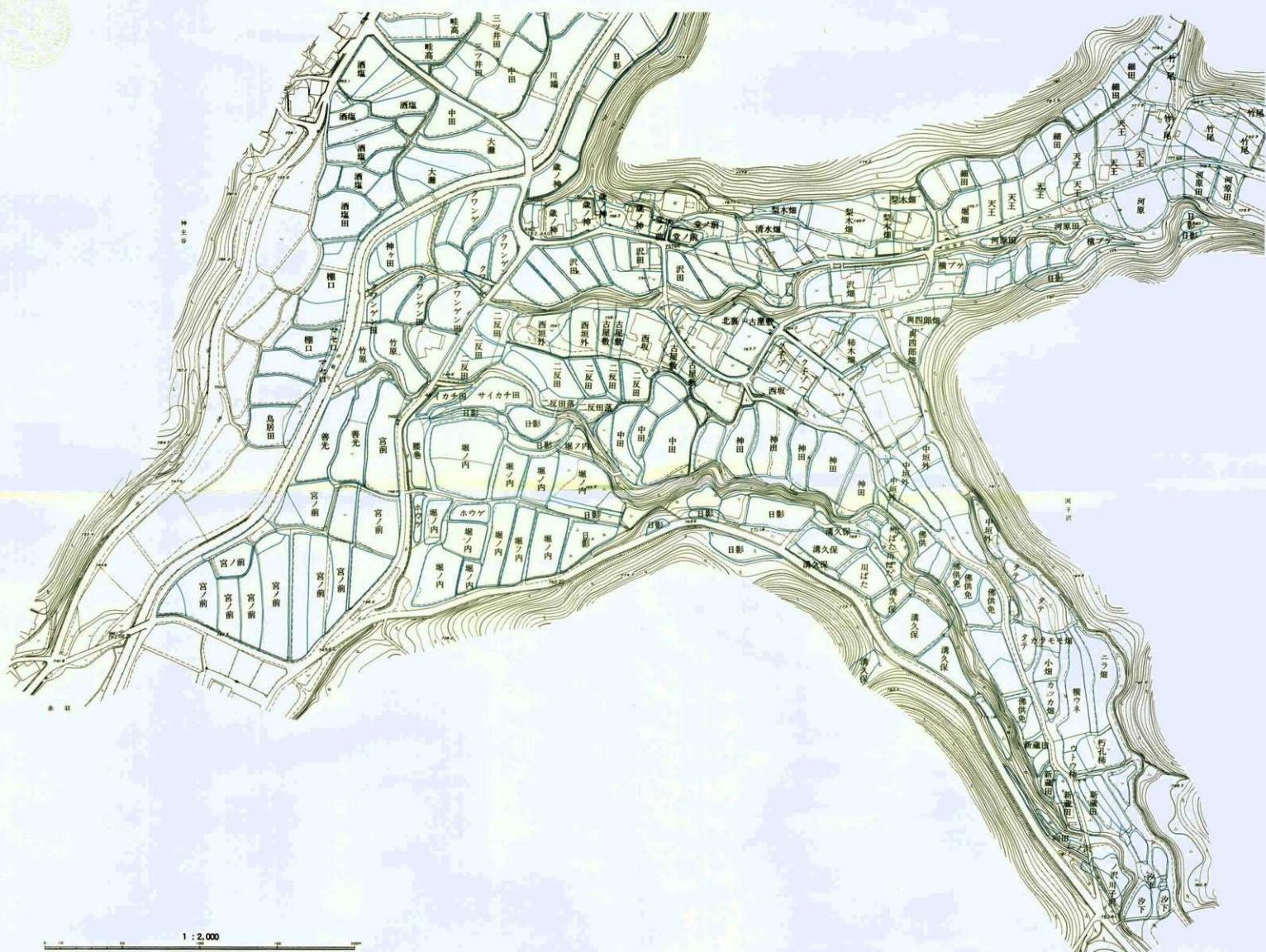
付図1 場内の内道路平面図(1) (S=1/200)



付図2 場の内道路平面図(2) (S=1/200)



付図3 山寺地区水系図 (1/2,000)



付図4 山寺地区小字図 (S = 1/2,000)



092.131

H 89